北海道遺産構想推進協議会情報誌

北海道遺産びと

vol.7



北海道遺産構想推進協議会情報誌

北海道遺産びと

vol.7





52の宝物がある。
道民参加によって選ばれた『北海道遺産』。
そのキーワードは「次の世代に引き継ぎたい北海道の大切な宝物」だ。
なかば埋もれ、忘れかけ、当たり前になっていたコトやモノに
光があてられ、関心が寄せられてきたかのようにとられることもある。
しかし、選ばれた宝物たちは、少し違う。
それらは地域の人々と常にともにあり、時代が移ろうとも
大切に守られ、愛され、誇りとして存在していた。
北海道遺産の選定は、その確認作業であり、
次世代への継承を絶えさせない、未来への約束でもある。
また、この大地にあるであろう無数の宝物たちの象徴でもある。
人が創造したもの、継承してきたもの、あるいは人の叡智の及ばないもの。
それらは、人々のこころや行為を映す鏡ともいえる。
人は何を思い、何を見つめ、何を伝えようとしているのだろう。
北海道各地に「北海道遺産びと」をたずねてみた。



CONTENTS ※敬称略

4 特集1　北海道遺産びと

5 ばんえい競馬調教師【北海道の馬文化】｜服部　義幸

8 北海道アウトドアガイド【函館山と砲台跡】｜木村　マサ子

10 北海道立オホーツク流氷科学センター所長【流氷とガリンコ号】｜青田　昌秋

16 ウイスキー樽職人【ニッカウヰスキー余市蒸溜所】｜長谷川　清道

20 黒松内町ブナセンター職員【北限のブナ林】｜齋藤　均

22 昭和新山国際雪合戦実行委員長【昭和新山国際雪合戦大会】｜堀口　一夫

24 アイヌ口承文芸継承者【アイヌ口承文芸】｜川上　将史

28 本間家4代目【増毛の歴史的建物群】｜本間　櫻

32 れんが職人【江別のれんが】｜吉田　裕二

34 江差追分会師匠会会長【姥神大神宮渡御祭と江差追分】｜青坂　満

12 座談会　―北海道の宝物　それは夢と元気をはぐくむ　未来への贈り物―
森陵一　NPO法人やきもの21理事長 ／ 高橋はるみ　北海道知事 ／ 辻井達一　北海道遺産構想推進協議会会長
コーディネーター　北海道新聞社取締役広告局長　池田清志

エッセイ
15 藤倉 英幸　風景の中にある物語に耳を傾けたい
19 本多 貢　北海道の地名と謎解き―余市の黒川―
27 藤村 忠寿　北海道を外から見てみると
31 橋本 登代子　先人の「おもい」を伝える街づくり
41 渡邊 俊博　「オライサン」で元気
45 岡本 洋典　雨竜沼湿原のファンを求めて
52 貫田 桂一　心意気の差が味に出る

37 特集2　北海道遺産びと　グループ篇

38 ① NPOひがし大雪アーチ橋友の会【旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群】
39 ② 白滝悠遊塾【オホーツク沿岸の古代遺跡群】
40 ③ かがやけコトニ実行委員会【屯田兵村と兵屋】
42 ④ 苗穂駅周辺まちづくり協議会【札幌苗穂地区の工場・記念館群】
43 ⑤ 登別市観光ボランティアガイド会【登別温泉地獄谷】
44 ⑥ 認定NPO法人霧多布湿原トラスト【霧多布湿原】
46 ⑦ 土の館友の会【土の博物館「土の館」】
47 ⑧ ダウン・ザ・テッシ-オ-ペッ実行委員会【天塩川】
48 ⑨ 赤平コミュニティガイドクラブTANtan【空知の炭鉱関連施設と生活文化】
49 ⑩ 旭橋を語る会【旭橋】
50 ⑪ 北海道遺産活用連絡会議【稚内港北防波堤ドーム・宗谷丘陵の周氷河地形】
51 ⑫ NPO法人ピアソン会【ピアソン記念館】

53 特集3　北海道遺産びと　楽しむ・学ぶ

楽しむ 54 北海道遺産を完全制覇　高瀬 英雄・淑子夫妻
路面電車とアマチュアカメラマン　野村 耕一
北海道遺産ツアーをめぐる人々　シィーピーツアーズ　戎谷 侑男
学　ぶ 56 「炭鉱サミット2005in夕張」と札幌学院大学大学院
「全国こども橋サミット」と北海道教育大学附属旭川小学校
北の縄文CLUBの「縄文文化体験学習」

58 北海道遺産ガイド　62 北海道遺産の分布



若者は果敢に挑み、走り続け、齢を重ねてきたひとは、道しるべをつける。
語り継ぐ思いがある。技の継承がある。継いできたものを生かそうとする知恵がある。
自然を見つめる真摯なまなざしがある。北海道遺産は、そんな人々の物語でできている。



特集❶

北海道遺産びと

服部義幸

ばんえい競馬調教師
はっとり　よしゆき



Yoshiyuki Hattori

北海道遺産びと

世界にひとつの競馬。その誇りを胸に、調教師は駆け続ける。

北海道の馬文化

もっと近くで見てほしい手作りのエキサイトゾーン

200メートルの直線コースに、大小2つの障害がある。ゲートが開き、馬たちが第1障害を一気に駆け上がる。障害を越えたところで、騎手は手綱をしぼり、馬にひと息入れさせる。高さ1・7メートルにも及ぶ第2障害をいかに越えるかが勝負の分かれ目になるからだ。そんな駆け引きが行われているコースのすぐ横で、観客は馬とともに歩き、止まり、声をかけ、こぶしを固く握る。帯広競馬場にコースから約10メートルの至近距離に造られた「エキサイトゾーン」。発案から造作まで先頭に立って行ったのが、服部義幸調教師だ。ばんえい競馬の調教師と騎手により結成されている調騎会の会長でもある。

「速さを競う平地競走が目で追う競馬だとすれば、ばんえい競馬は身体で追う競馬。そのことを実感してもらいたくて作ったんだ。お金はないから調教師、騎手、厩務員、組合の職員もみんなで協力してね」

そのアイデアを思いついたのは、ナイトレースで有名な大井競馬

服部　義幸／はっとり　よしゆき　釧路管内弟子屈町生まれ。会社勤めをやめ、27歳で調教師に弟子入り。厩務員を2年経て、ばんえい競馬の騎手となる。40歳で独立し服部厩舎を構える。2005年、調教師として史上6人目の通算1000勝を達成。2002年4月から7代目の調騎会会長に選ばれ、現在2期目。



帯広競馬場のコースのすぐ横に設けられた「エキサイトゾーン」では、観客が声援を送りながら馬と一緒に移動する。岩見沢競馬場にも設けられており、馬の振動が伝わるとファンからも好評だ

Yoshiyuki Hattori

北海道遺産びと

場だという。「目の前を駆けぬけるサラブレッドに何万人もの人が歓声を上げる。しかも花火まであがる中を馬たちが走っている。こうやってお客さんに喜んでもらうのがプロの仕事だと思ったね」

どこまでコースと観客を近づけられるか、騎手たちと話し合いを重ねた。最初は戸惑っていた騎手も、自分の名前をすぐそばで呼ばれることでますます気合が入るようになってきた。「競馬はそもそもお客さん本位のものだからね。望まれていることは何でもやってみたいんだ」

思いついたらすぐ行動 人間たちも走り出した

服部氏が会長職に就いたのは2002年4月。さっそく調騎会の中に広報委員会をつくり、ともかく「ばん馬」という言葉が世に出ることをやってみようとアイデアを出し、行動に移していった。まず、馬に馬車をつけて保育園や福祉施設の訪問を行った。最初は馬の大きさに驚く子どもたちも、柔和な馬の顔をなで、大きな背中のあたたかさに喜ぶ。今では、施設の方からぜひ来てほしいと言われるようになり、「あの馬に会いにきた」と足を運ぶ親子連れも徐々に増えてきた。開催地のお祭りなどにも積極的に参加し、もちをついてふるまうこともあった。「もちつきもばん馬も腰が大事。力強いレースをぜひ見にきて」と宣伝も忘れない。

「地域に好かれる競馬になろう」というのが今の調騎会の合言葉だ。寒い季節には競馬場の中で豚汁や甘酒をふるまう。「そんな時にお客さんの生の声が聞けるんだわ。じゃあ今度はこうしようとかアイデアも出てくるしね」

1年間に、旭川・岩見沢・北見・帯広と4つの競馬場を移動し、開催するばんえい競馬。忙しい本業の合間をぬっても競馬場を飛び出していくのは、ばんえい競馬に関わる人々がみな危機感をもっているからだ。不況やレジャーの多様化から、売上、観客数ともに厳しい状況が続いている。現に北海道に暮らしている人でもばんえい競馬の生の迫力にふれたことがない人はかなりいるだろう。「今日やって、明日売り上げが伸びるなんて大それたことは考えちゃいない。でもここは人間が踏ん張って走らないと」

騎手から調教師へ 苦難の道を救ったもの

弟子屈町で牧場を営む家に生まれた服部氏は、生まれたときからばん馬に囲まれて暮らしていた。学校を出たあとは、一時、会社勤めも経験したが、「やはり馬に関わる仕事がしたい」とばんえい競馬の騎手を志す。9年間の騎手生活は小柄な体格がハンデとなり決して平坦ではなかった。40歳で調教師として独立するが、最初は管理馬も少なく、思うように成績も上がらなかった。「なんか何もかもうまくいかない時に、親父を知っているって人が馬をまかせてくれてね。その時、人と人のつながりの有難さを感じたんだ」

それから、道内各地の生産牧場に通い、いい若駒を見つけては馬主に紹介するようになった。「自分で見つけた馬が順調に育って、重賞レースに勝った時は自分もうれしいし、馬主さんも生産牧場も喜んでくれる。それが、この仕事の醍醐味だね」。05年には、調教師として史上6人目の通算1000勝を達成した。現在は、馬房の上限である25頭の馬とデビュー前の若駒をかかえる大所

一生懸命やると馬は必ず応えてくれる。そこがめんこいんだ。









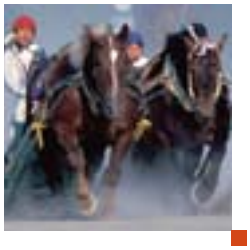
1「ずり引き」と呼ばれる朝の調教風景。馬の汗や息が白い湯気となって立ちのぼる　**2**どさんこ馬のレースと思われがちだが、開拓時代に輸入されたペルシュロン種などの重種馬が主流　**3**レースに出る馬は障害の登坂とスタートダッシュを重点的に調教する　**4**重さ1トンの馬の足をもち上げ蹄鉄を打つ。すべてが重量級の迫力だ

帯となった。「馬選びは服部さんにまかせるわ」という馬主もいて、今も初心変わらず、道内の牧場めぐりは続いている。

人馬一体で北海道を駆けめぐる

朝6時。帯広の町が動き出した頃、すでに競馬場の中は熱気で包まれていた。早朝、馬房から出された馬は、まず広大な練習用馬場でそりを引きながらゆっくりと周回し、ウォーミングアップを行う。それが終わると障害を越える訓練がはじまり、重さ1トンの馬体から汗が蒸気となって立ちのぼる。1頭40分～1時間の調教は、レースのない日も毎朝続けられており、約200頭のばん馬がトレーニングをしている姿は迫力とともに、アスリートの美しさを感じさせる。現在、ばんえい競馬に所属している競走馬は約760頭、騎手32人、調教師38人。ひとつの開催が終わると約300人の人間と600頭以上の馬が、次の開催地へと移動する。その結びつきの強さからか、黙々と練習を重ねる馬たちの横で、人々は声をかけあい、笑い、和やかな空気が競馬場を満たしていた。

「若い人はけっこう入ってくるよ。中には、お金が良さそうだからって馬にさわったことがないのもいる。でも最初はそれでもいいんだわ。一生懸命仕事をする人間を馬が先に見抜く。そして、応えてくれる。やる気のある人間はそのうち馬がめんこくてしかたなくなるから」。馬のそばによると服部氏の顔が変わる。「めんこい」のが伝わってくる。「この重種馬の競馬は北海道にしかないんだ。世界にひとつの競馬なんだからみんなで守らないと」。馬とともに4つのまちを移動し、生産牧場をまわり、さらには「ばん馬」の宣伝になると思えば、道内外どこにでも出かけていく。服部氏にとって一番落ち着く場所はどこなのだろうか。馬をなでる手をとめ、ちょっと考えてから「やっぱり競馬場だな」と笑った。



北海道の馬文化

北海道は、農耕馬と文字通り人馬一体となって開拓されてきた歴史をもつ。また、サラブレッドの馬産地である日高などの牧歌的な地域は、北海道の代表的なイメージを形づくっている。近年では、〝競走馬としての馬〟だけではなく、道内各地でホースセラピー（乗馬療法）やホーストレッキングなど、馬による癒しやライディングそのものを楽しむための新しい馬文化も形成されつつある。

木村マサ子

北海道アウトドアガイド
きむら　まさこ



Masako Kimura

北海道遺産びと

要塞を造るために
頂上が削られた山だって
誰も言えなかった。

函館山と砲台跡

戦時中に生まれた者として語り継ぎたいことがある

一日をのんびり過ごす日はない。じっとしているのが苦手で、テレビもニュースしか見ない。気が急くように動き回るマサ子さんを見て、友人は「そんなに先を急ぐな」と心配する。

「私は函館空襲があった7月14日生まれなの。空襲警報を聞きながら、母は屋根裏で私をひとりで産んだの。だから、私が語り継がないでどうする。自分が生きているうちに、なんとしてでも調べたかった」

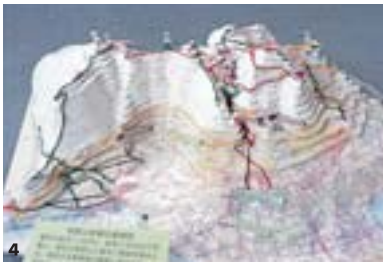
マサ子さんが函館要塞を無視できない最大の理由である。

産声を上げた住吉町は、函館山麓の浜辺にある。子どもの頃から海が庭であり、山が遊び場だった。自然観察指導員として函館山が職場になったとき、幼い記憶が噴き出した。北洋漁業に出ていた父は、船内で配られた酒をミカンの缶詰に交換して持ち帰り、子どもたちを喜ばせた。その缶詰を要塞に座って食べたことが忘れられない。亡くなった祖母は、台風が来ると仏壇や神棚を背負って山の中の兵舎跡へ逃げ込んだ。

戦争から帰ってきた叔父は、小学に上がったマサ子さんをよく山へ

木村　マサ子／きむら　まさこ　1945年、函館市に生まれる。77年から、函館市土木部公園緑地課の嘱託指導員として函館公園に勤務。仕事として函館山の巡回を始める。92年から12年間、函館山ふれあいセンターの自然観察指導員として活躍。函館産業遺産研究会の一員として函館要塞跡の調査に深く関わる。03年、北海道アウトドアガイドの認定を受ける。



1「カエルを見せたら亀だと言われましたよ」「今の子はカエルの卵も見たことないんだ」ふれあいセンターで後輩の指導員と談笑するマサ子さん　**2**「春は登り目線で草花を楽しむ。冬は下り目線で函館の街並みを眺めながら降りるのがいいの」マサ子さんは決まった場所で同じ解説なんかしない　**3**「函館山で拾ってきた石を削って貼り付けたりしてさ」全盲の学生たちに、どんな山道を歩くのか知ってもらいたくて制作した模型　**4**1899(明治32)年の要塞工事の地図を模型にして、現存する要塞跡の調査に役立てた(高さ1／2500 面積1／5000)

連れて行った。子どもを見かけると「こんな子どものいる家族にも手榴弾を投げて、吹っ飛ばし殺してしまった」とつぶやいていた。深い心の傷を癒すために、函館山の自然を求めたに違いない。5円玉2枚で鳥の鳴き声を出すことも、野鳥を餌付けする方法も、叔父から教わった。「だから私、傷ついた野鳥をたくさん保護してるの」。函館山はマサ子さんにとって、すべての原点である。

納得がいかないときちんと伝えられない

「花や木の名前を覚えればいいと思って始めたガイドだけど、朽ち果て、その存在も草木に埋もれつつある要塞の解説も、きちんとしたかった」。何のために、どのように造られたのか、資料を探し始めたのがきっかけである。要塞地帯法が公布された1899(明治32)年から100年目の年、友人の伝手で国会図書館の資料を入手。さらに北大工学部に函館要塞を卒論に選んだ学生がいたことを思い出し、彼の論文から想像以上の資料が防衛庁の戦史資料室に残されていることを知り、実際に資料室へ2度も足を運んだ。

「もっと、知りたい」気持ちが突き進む。『函館産業遺産研究会』の富岡由夫会長に収集した資料を渡し、函館山の研究価値をアピールした。「なんでそんなことを調べるんだ」と市役所に保管されている地図のコピー許可が下りないこともあった。新説を報告しても、まったく受け入れない郷土史家もいた。それでもかまわない、調べなければ気がすまない。終戦当時の要塞施設を手書きしたボロボロの地図を頼りに現場の確認作業が始まった。「いちばん嬉しかったのは、千畳敷で日本煉瓦の刻印を偶然見つけたとき。要塞築造の年代を割り出す貴重な手がかりにもなる発見だったので、雨が降ってたのに、スキップして帰りたいくらいの気持ちだった」

だが、このれんがさえも、後に研究者には否定されてしまう。

函館山はどんな話にも結びつけることができる

自分が納得したいから調べ尽す。マサ子さんの行動に〝徒労〟など、ない。「自分で調べると感動するよね。発見する喜びがあるよね。そうすると、人に喋りたくなるのさ」。マニュアル通りじゃないガイド。これはもう天職である。

誰が相手でも、遠慮なく浜言葉を使う。小学校の作文で直されることもあった。でも、マサ子さんは違うと考える。土地の言葉でしか伝えられないことがある。たとえば、函館は7月までガスがかかり、蝦夷梅雨がある。だから「暑い」ではなく、湿気を感じる「ぬくい」と表現する。その方言を聞くだけで嬉しくなるのに、いま使う人はほとんどいない。

「要塞は確かに軍事的なものだけど、函館の歴史や産業、自然科学、土木技術、造船の話まで、あらゆる話に結びつけることができるの。自分さえ勉強すれば、ガイドの種はつきない」。しかも、手抜きできない性格らしい。全盲の学生たちが来るとなれば、手でさわって確認できる模型地図をつくる。聾唖者が反応して発した言葉を聞き取れなかったと思い出しては涙ぐむ。山に登らなくても、会いたくなる人である。



函館山と砲台跡

函館山は明治期、国によって大がかりな要塞化が進められた。その後、第二次世界大戦後まで立入制限されたため、要塞の存在自体はほとんど知られていなかった。一方で、人が入山しなかったおかげで、貴重な動植物の宝庫としての価値を増すことにもなった。封じられた歴史と自然に触れる、この山ならではの散策コースが一般開放されている。

青田昌秋

北海道立オホーツク流氷科学センター所長
あおた　まさあき



Masaaki Aota

北海道遺産びと

やっぱり、ふるさとの歌を歌える子どもたちじゃないとかわいそうだもの。

流氷とガリンコ号

海明けは希望の持てる言葉

2006年の紋別の「海明け」は2月17日で、網走地方気象台紋別測候所の観測史上2番目に早いという。何しろ接岸初日が2月8日、その後10日ほどで海明けなのだから、異例の早さといってもいい。道立オホーツク流氷科学センター所長、「流氷博士」の青田昌秋先生にたずねてみた。

地球温暖化の影響がここにも？

「ここの気温が高いからといって、世界中の気温も高いとはいえない。ただ、北海道の流氷は世界的に見れば南限にあたるわけだから、温度変化に敏感に反応する。北海道の流氷はかろうじて凍っている状態。だからちょっとの温暖化でも海水が凍らなくなる。凍ったとしても流氷の勢力はぐっと小さくなる。だから、ここの流氷は高感度の温度センサーといえますね。早く流氷が去ると『海明けだね、今年は春が早いね』という。海明けという言葉は、本当に希望の持てる言葉だ。アメリカじゃブレイク・アイスという。氷が砕ける。なんて、品のない（笑）」。ブレイク・アイスを一蹴し、博士は呵呵と笑う。

青田先生からホメられると、「海明け」も幸せだ。さて、世界地図を広げてみよう。オホーツク海の全貌

は、シベリア大陸、カムチャッカ半島、千島列島の島々に囲まれ、ゆるやかに閉ざされている海であることがわかる。北海道地図の中でいつも眺めているオホーツク海が、あらためて大きな海だったことを認識する。確かに、北海道はその南限だ。「北の最果て」「北限の」など、北がらみの形容詞がしみついてしまった頭に、〝南限〟という表現が新鮮に響く。先生にもうひとつ質問。流氷はアムール川からやってくるんですよね。「違います」。先生はきっぱりと否定。

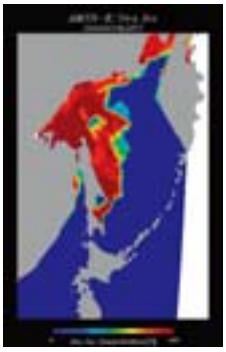


図1　2004/1/23



図2　2005/1/23

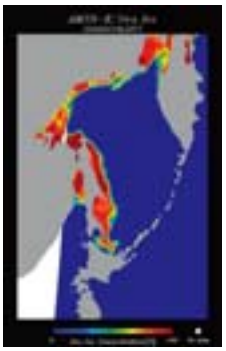


図3　2006/1/23

■オホーツクの海氷分布　図1〜3を見ると、オホーツク海全域でのこの時期の流水面積は、2004年以降、年々縮小傾向にあることが分かります。特に今年の流水面積は、昨年に比べて、流氷のふるさとであるオホーツク海北西部のシベリア沿岸付近で大きく縮小していることが分かります。オホーツク海は、海氷が形成される世界中の海の中で最も低緯度に位置する海域で、ここで成長する海氷域の増減は、私たちの住む日本列島周辺の気候や漁獲量と密接な関わりを持っています。オホーツク海での流氷の成長の様子を見守ることは、地球環境の健康状態の現状そして未来を知る物差しとしても大変重要です。

上図は海氷密接度を表しています。海氷密接度0%の開放水面（海面）は濃い青、密接度の低いところは水色で、高くなるにつれ黄色から赤で表示し、100%（赤）は全て海氷で覆われている状態です。陸域は灰色、データのないところは白で示しています。（提供 JAXA）

青田 昌秋／あおた　まさあき　1938年、長崎県長崎市出身。北大名誉教授・道立オホーツク流氷科学センター所長。65年北大理学部を卒業し、北大低温科学研究所付属流氷研究施設（紋別）に助手として勤務。83年から02年3月まで教授、施設長を務めた。流氷砕氷船ガリンコ号・オーロラ号の開発にも携わる。現職は02年6月より。受賞歴は、北海道新聞文化賞科学技術部門（97年）、日本海洋学会賞（03年）。著書に「白い海、凍る海―オホーツク海のふしぎ」（東海大学出版会、93年）ほか。

子どもたちに教えてきて本当によかった

「ニュースなんかで、今年もまた冬の使者、流氷がアムール川からやってきましたって言うけど、違うんです。海が凍るんですよ。流氷ができる仕組みは、こうです。周りが島々に囲まれたオホーツク海に、アムール川の冷たい真水がどんどん流れてきて、表面に広がる。表面に塩分の薄い層ができます。これを塩分の二重構造という。冷やされて海水の対流がおきるんですが、下の塩分の濃い層までで対流はストップ！　なぜならその下には塩分の濃い重い水が頑張っているから。つまり、対流は上層だけで停止し、あとはどんどん冷えるだけ。アムール川がオホーツク海を凍りやすい海にしていることから、アムール川は流氷の生みの親といえます。だけど流氷が直接アムール川からやって来るのではありません」

頭の中の〝海明け〟である。文字通り、疑問が氷解したのであった。それにしても、なんとわかりやすい説明だろう。子どもたちに人気があるのも頷ける。紋別で毎年開催される『北方圏国際シンポジウム』では、小学生のためのシンポジウムも毎回実施されている。「大切なことをやさしく、やさしいことを深く、深いことをおもしろく」をモットーとする先生の『子ども流氷シンポジウム』は、もう20回を数えた。

「今から5〜6年前のこと。ある冬の朝、岸壁を散歩していたら、若者が2人、海を見て立っていた。青年の一人がニコニコしながら、もう一人にていねいに流氷の説明をしているのが聞こえてくる。シンポジウムで僕が教えてきたことだなぁって思いました。帰りがけに会ったら、その青年は『こども流氷シンポジウム』の第一期生だったことが分かった。20代後半くらいだったかなぁ。ふるさとを出て大学かどこかへ行き、自分のふるさとを誇りに思って、流氷を見たことのない友人を連れてきたのかもしれませんね。こういう場面に会うとね、子どもたちに教えてきてよかったなぁって思いますね、ほんとうに。『こども流氷シンポジウム』は、ずっと続けたい」。さらに青田先生は、こう言葉をつないだ。

「ふるさとをよく知ることが大事。それを子どもたちが誇りに思ってくれればいい。流氷の白さ、夏の海の潮風の匂い、野っぱらで遊んだこと、そういう思い出がいっぱいあってほしい。やっぱりね、ふるさとの歌が歌えるような子どもたちじゃないと。TVから覚えた歌だけじゃかわいそうだもの」

1年住めばそこがふるさとになる

長崎の高校時代。3年間病気をして運動も禁止され、ほぼ拘束状態だったという青田青年は「とにかく箱庭みたいなところから逃げ出したくて」北海道大学へ。専攻は地球物理学と物理学だったが、誘われて流氷の世界へ。「研究的な要素では、同じ地球というフィールド科学なので、まったく違う世界へ行くという気はしなかった」という。「海が見えないと精神的に落ち着かない、不安定な気持ちになる。海のあるまちに生まれ育ち、もともと海志向型だからでしょうかね」。オホーツクの海を見つづけ41年。「1年住めば、そこがふるさとになる」という青田先生の持論からすると、紋別は大事な大事なふるさとに違いない。

今年の『北方圏国際シンポジウム』で、先生は実行委員長として次のように開催の意義を語った。「地球はふるさとの集まりであり、ふるさとを考えることが地球環境を守ることにつながる」と。



流氷とガリンコ号

流氷は、わが国では北海道のオホーツク海沿岸でしか見られない。紋別市では、1986年から毎年2月に世界各国の流氷研究者が一堂に会する『北方圏国際シンポジウム』を開催している。また、87年からは世界初の流氷砕氷船『ガリンコ号』が就航。その後網走でも『オーロラ号』が就航し、北海道の北東地域に新たな冬観光を展開している。

北海道、未来への「架け橋」～北海道遺産～

北海道の宝物
それは夢と元気をはぐくむ
未来への贈り物



NPO法人やきもの21理事長
森陵一氏

北海道知事
高橋はるみ氏

北海道遺産構想推進協議会会長
辻井達一氏

コーディネーター
北海道新聞社取締役広告局長
池田清志氏

座談会



北海道遺産びと

次の世代に引き継ぎたい北海道ならではの宝物、それが「北海道遺産」。
豊かな北の大自然や歴史、文化、生活、産業など、
第1回選定、第2回選定合計の応募数約2万5千通。
そこに書かれた延べ約5千300件もの有形・無形の候補の中から
2001（平成13）年の第1回選定により25件が、
さらに04（平成16）年には27件が選定され、合計52件の遺産が誕生した。
まちの宝物を探し、守り、活用することで
北海道の元気や新しい魅力発掘につなげたい―。
そんな思いの込められた北海道遺産は、今後どんな展開をしていくのだろうか。
北海道知事の高橋はるみ氏と、北海道遺産構想推進協議会会長の辻井達一氏、
さらに第2回選定で「江別のれんが」が選定された
NPO法人やきもの21理事長の森陵一氏をお迎えし、
北海道遺産と北海道の未来像について、それぞれの立場から意見や思いを語っていただいた。
なお、座談会は「札幌苗穂地区の工場・記念館群」として北海道遺産に選定された
「サッポロビール博物館」で行いました。

2005（平成17）年3月18日の北海道新聞広告特集『北海道、未来への「掛け橋」～北海道遺産』に掲載された座談会を、北海道新聞社のご協力により再掲しています。内容はすべて掲載当時のものです。

北海道は宝の山
歴史のロマンや先人たちの苦労を知る良い機会に


北海道遺産構想推進協議会会長
辻井達一氏

池田　昨年秋に北海道遺産第2回選定が終了し、徐々に道民にも理解が深まってきたように見受けられますが、この場であらためて「北海道遺産とは何か」を北海道遺産構想推進協議会の辻井会長にお話しいただきたいと思います。

辻井　今まで見過ごされてきたものや、その地域では当たり前のように思われてきたことでも、ほかの人や地域から見れば新鮮に感じるものがあります。北海道遺産はそれらを再発見しようと始めた運動です。ただ単に文化財を探そうというのではなく、地域に役立ち、活用できるものを発見していこうという、少し欲張りな思いもあったんです。

池田　確かに、ジンギスカンやラーメンといった食が遺産になるなど、選定基準がユニークですよね？

辻井　はい。いくつか考えられた基準の中にはまず、「学術的価値・美的価値」が挙げられます。そして私たちは「アプローチ価値」というものを加えました。これはどんなに遺産に値するものでも「立入禁止」では身近さを感じられず、今後の活用価値に結び付かないと考えたからです。また「思い入れ価値」も重視しました。これは地域の人々が遺産を大切にし、うまく活用する熱意や行動力があるかどうかを見るものです。どんなに立派でも、人々の思いがないと遺産は輝きませんから。

池田　なるほど。北海道遺産の目的や特色が明らかになったところで、高橋知事の北海道遺産についてのお考えをお聞きかせください。

高橋　まず北海道が「宝の山」であると再認識できたと思います。選定には第1回、第2回合計で約2万5千通もの応募があり、多くの人々がかかわったことにも意義があると思います。また、北海道のアイデンティティーを知る良い機会になったのではないでしょうか。遺産に選定されたものには、北海道の大切な歴史や先人たちのご苦労といった物語が含まれています。例えば、第2回選定の「北海幹線用水路」は一見、どんなところが遺産なの？　と疑問に思う方もいるかもしれません。しかし、農業専用としては日本一長いこの用水路は北海道を食糧大国にしてくれた、大変な功労者といえます。また農耕や運搬といった開拓の労働者として開拓民と苦労を共にした「北海道の馬文化」には独自の歴史的背景を感じますし、「摩周湖」「雨竜沼湿原」といった自然は、地元の方たちの地道な保全活動によって美しさが保たれているなど、北海道の歴史や先人たちのロマン、人々のご苦労といった物語に思いをはせる良い機会になったと思います。


北海道知事
高橋はるみ氏

北海道遺産は地域の努力と知恵や工夫でもっと輝く

池田　第2回選定で「江別のれんが」が選定されました。森さんは現在のやきもの21の母体となる「えべつやきもの市」実行委員会の立ち上げから活動されていましたが、活動の経緯を教えてください。

森　「えべつやきもの市」は1990（平成2）年から始めてもう15年になりますが、最初は小規模なもので何年続けられるかなと思っていたくらいです。立ち上げの際、まず自分たちが住むまちの魅力は何だろうと探しました。そこで「やきもの」に目を向ける訳ですが、継続には経済の活性化と自立可能な活動の組織体を創ろうと考え、やきもの21は、現在NPO法人となっています。

池田　継続されていく途中で北海道遺産に選定されたのですが、活動に変化などはありますか？

森　選定をされてからまだ日が浅く、大きな変化はありませんが、認定証の受与式で出会った人々の話を聞いて納得したことがあります。それは遺産は単に「褒美」ではなく、それを取り巻く地域の人間がこれから遺産をどう活用していくか、私たちの「知恵と工夫」次第でどんなふうにも発展させることができるんだと認識させてもらったんです。そうした意識改革のきっかけを頂戴したという意味で、選定されたことで気持ちも新たになりました。


NPO法人
やきもの21理事長
森陵一氏

遺産のまちに元気と活力が生まれ始めている

池田　森さんの場合は選定される前から「わがまちの遺産」を探し活動していたのですが、選定後に新たな取り組みに挑むNPOや民間団体も多いと聞きます。具体的な例を教えていただけますか。

辻井　ありがたいことに、たくさんの例があります。一つは第1回選定の「空知の炭鉱関連施設と生活文化」ですが、閉山後も地元に残る元炭鉱マンが施設内のボランティアガイドを務めているんです。03（平成15）年には赤平市が「国際鉱山ヒストリー会議」を誘致し、各国から参加した研究者たちが炭鉱施設の保存状態と住民の熱意を絶賛したと聞いています。

高橋　最近では石炭を知らないという子どもたちが増える中、日本の近代化を支えた石炭産業が、

北海道に存在していたことを伝えられる、とても貴重な活動だと思います。

辻井　「留萌のニシン街道」として選定された地域でも、地元の方が自分たちの経験を観光客に語る機会をつくっています。かつてその地域がニシンで栄えたことを知らない世代にとって「生の声」が聞けることは大変有意義ですし、何より臨場感がある。そうした方たちがイキイキと話す姿を見ると、私たちもうれしくなりますよ。「旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群」も廃線になって忘れ去られていたアーチ橋の良さを見直そうと、NPOひがし大雪アーチ橋友の会のメンバーたちが、役場や開発建設部と共に散策路やビュースポットの看板整備、イベントの企画を立てるなど、PRにとどまらない行動力が素晴らしいと思います。どの例も共通しますが、世代を越えて交流し、また立場や分野を越えて協力し合う点が、地域活性化のかぎになっているのかもしれません。

遺産を、資産にビジネスの視点から見る北海道遺産とは

池田　北海道遺産の動きに伴い、テレビ番組やロゴを配したグッズが出たり、遺産を巡るツアーなどが登場するなど、民間企業も動き出しています。辻井会長は、こうした活動をどうお考えですか。

辻井　北海道遺産を巡るツアーはいち早く始まりましたね。最近は短い時間や日数で旅することよりも、ゆっくりとその土地を楽しむ旅行が主流になっていますから「遺産ツアー」は非常にマッチしています。単に景色が雄大、食べ物が新鮮という北海道旅行に、深みを与えると思うんです。また、酒のラベルにロゴが配されていたり、切手やはがきに遺産の絵柄が採用されるなど、土産や郵便物になれば全国に北海道遺産をアピールできるわけですから、その効果は非常に大きなものです。

高橋　私もアイヌ文様入りの名刺を持ち歩いていますし、ミニ道債のお礼状の裏面に遺産の絵柄を入れるなど、私たちもさまざまな機会をとらえて、北海道の宝物をアピールしています。企業にとっても北海道遺産はビジネスチャンスと考えていただければと思います。

辻井　そうですね。遺産という言葉を使っていますが、未来につながる「資産」と考え、価値を高めていただけるとうれしいですね。

池田　選定をされた52件以外にも素晴らしい宝物があるような気がしますが…。

辻井　確かに52件でひと区切りをつけましたが、それは苦渋の選択で、決して終わりではないんです。森さんの発言にもありましたように、今後は「わがまちの遺産」探しへとステップを進めてほしいと思っています。それを私は「ムラの遺産」と呼ぶのですが、もっと「遊び心」を持った地域オリジナルの取り組みとして一層の展開を期待しているんです。

森　私たちもそうでした。「えべつやきもの市」は当初、近隣の商店の方たちが定休日も店を開けることに戸惑っていたのですが、魅力的な催し物になるよう工夫することで来場者が増えれば、自然と出店数も増える。すると近隣住民や飲食店などほかの業種にも協力体制が広がっていきました。二つの遺産を見い出すことは地域の一体化を生み、まちの自信にもつながったと思います。

子どもたちに贈りたい、未来を創造する宝と力

高橋　確かに北海道は今、自信を取り戻すことが大切です。豊かな自然も、おいしくて安全な食材も、ITやバイオといった技術も、チャレンジ精神もある。05（平成17）年度は「観光と食」を柱に、世界を視野に入れた北海道ブランドを創りあげたいと考えていますが、北海道遺産はそのベースとなる財産であり、北海道が持っている潜在力を引き出す良いきっかけになったと思います。先の事例のように、NPO法人や民間団体・企業などのそれぞれの創意工夫で北海道遺産は、個性的かつダイナミックな展開へ進む転換期ではないでしょうか。今こそ、一丸となってPRと定着を目指したいですね。

森　私の立場から言えば遺産というステージを用意してもらったという感じです。その舞台を各人がどう盛り上げるのか、江別では今「ハルユタカ」という栽培の難しい小麦を特産品にしようと、生産者と消費者が向き合い、高品質かつ新しい広がりを見せた商品開発に取り組んでいます。そうした地域の宝物を自信を持って発信する動きがどんどん強まっていることを感じます。

辻井　遺産構想も次の段階に入ったんだと思います。「元気の種」はすぐ足元にある、それに気付いてほしい。

高橋　例えば「昭和新山国際雪合戦大会」が良い例だと思います。長い間、当たり前だと思われてきた北国の子どもたちの遊びを国際的なイベントとして育てあげ、まちの活力にしているのですから。つまり北海道遺産は見る・眺めるものではなく、触れて・楽しんで・味わうものだと思います。活力の種となる遺産を価値として磨き、次の世代にきちんと伝えていきたいですね。子どもたちには総合学習の一環に取り入れるなどして、もっと北海道遺産に触れてほしいと思います。歴史や生活背景など、北海道の豊かなストーリーが込められた北海道遺産は、子どもたちにとって北海道を誇りに思える物語だと思うんです。それをしっかりと伝えるのが私たち大人の責務。そうすることで北海道遺産が本来目指していた、未来への贈り物になるのだと思います。

Essay

藤倉 英幸

風景の中にある物語に耳を傾けたい



私は岩内町に生まれ、高校卒業まで岩内、泊村に育った。ふるさとということになる。そのことの有難さを実感するのは、ふるさとを離れて15年も経って、つまり北海道の風景をテーマにして絵を描きだしてからだった。道内各地を取材して歩きながら、何度も「この風景はどこかで見たことがある」という経験をした。それはまぎれもなく、ふるさとにつながる風景だった。

岩内、後志地方には北海道の風景のすべてがあると言っても過言ではない。日本海、たくさんの岬に漁村。田園が広がり羊蹄山、ニセコ連峰。そこに点在する湖沼。小樽の歴史。まさに風景の要素がぎっしりと詰まっている。そんな中に育ちながら、知らず知らずのうちに風景の見方というものを教わっていたのではないかと思う。感性というのかも知れないが、私の原風景であるふるさとがそれを育ててくれたのだと、いまさらながら感謝している。

ひとつの風景は、季節や天候によって違った表情を見せてくれるものです。『小さな旅』と称して絵の題材を求め歩きまわるとき、どう見ていかに切り取るかということよりも、五感を使ってどう感じるか、自分なりの小さな物語をそこに紡ぎだせるかが大事なんだといつも思う。表面からは見えない人々の暮らし、音やにおい、時間といったものが見えてくるか。こちらのアンテナの性能が問われているのだと。

私たちが前に生き続けようとするには、時に回帰がその原動力になってくれる。北海道遺産のひとつひとつは、まるでふるさとのようにそのことを教えてくれ、静かに力を与えてくれているはずだ。

私はその風景の中にある物語に、じっと誠実に耳を傾けていたい。



藤倉　英幸／ふじくら　ひでゆき　イラストレーター、画家。1948（昭和23）年岩内町で生まれ、泊村で育つ。岩内高校卒。74（昭和49）年から札幌でイラストレーターとして活躍。15年前からはり絵に取り組む。作品は北海道の風景をテーマにしたものが多く、「後志は風景の箱庭。北海道の風景のすべてがある」と語る。作品集に「四季彩紀行HOKKAIDO」（北海道新聞社）、「はり絵で描く風景たち」（日貿出版社）など。JR車内誌の表紙イラストでおなじみ。札幌市在住。

長谷川清道

ウイスキー樽職人
はせがわ　きよみち

Kiyomichi Hasegawa



北海道遺産びと

半世紀という時の軌跡。『神様』は、樽づくりとともに人生を熟成させる。

ニッカウヰスキー余市蒸溜所

凛と冷えた空気に、背筋が伸びる。

ここは、余市のニッカウヰスキー北海道工場。広い敷地の一角にある製樽棟に、後輩たちの作業を見守る厳かなまなざしがあった。

長谷川清道氏、73歳。余市のウイスキー樽の9割を手がけた名職人である。40年以上、ウイスキーのゆりかごをつくり続け、退職後も若い職人たちに技を伝えるため足繁く工場へ通っている。

〝樽づくりの神様〟――深い尊敬と憧れをこめて、後輩である弟子たちは長谷川師匠をこう呼ぶ。

「良い樽をつくってくれ」創業者の言葉にやり抜く決意を固めた

ちょうど半世紀前、23歳の長谷川氏はニッカウヰスキーの門をくぐった。実家が桶屋だったことから、すぐに製樽の現場へ配属された。

ニッカウヰスキーの創業者であり、日本のウイスキーの父と呼ばれる竹鶴政孝は、ウイスキーづくりの理想郷を探し求めて日本各地をめぐり、そして本場スコットランドの気候風土によく似た余市にた

どり着いた。同時に、ビール樽の職人であった小松崎与四郎を呼び寄せ、ウイスキー樽の製造に試行錯誤を重ねる。やがてニッカの樽づくりは小松崎によって確立され、長谷川氏ら数名の職人に受け継がれていく。

小松崎の指導は厳しかった。材料となる原木をはじめ重い道具などを使うため、肉体的にもきつい。何度も「しんどい」と思ったという。途中で辞めていった同僚もいる。

入社2年目のある日、長谷川氏は竹鶴政孝から声をかけられる。

「わたしは良いウイスキーをつくる。君たちは良い樽をつくってくれ」

胸にこみあげるものがあった。自分で選んだ道だ、絶対に一人前になろうと、長谷川青年は強く心に誓った。その決意がなければ、続けられなかっただろうと振り返る。

原木のように堅い右腕は樽づくり一筋の勲章

10年、20年…長い歳月「原酒」を守り、琥珀色に熟成させる樽。良い樽づくりの原点は、まずは材料の選別である。

ニッカでは、1970年頃まで北海道産ナラ材の原木を使い、手作業で割り出していた。年輪を正確に読み、ほぼ完璧な木板に仕上げなければ、樽から原酒が漏れだしてしまうこともある。原木のどの部分を使うか、その基本となるくさびの入れ方を、小松崎からみっしり仕込まれたという。柾目に割らなければ、狂いが生じて漏れの原因になってしまう。結果的には、貴重な原木を無駄にすることになり、コスト高にもつながる。まず、くさびを入れる部分にチョークで印を付けるのだが、間違えた場合は小松崎の容赦ない怒声が飛ぶ。

くさびを入れると、その部分を10kgもあるハンマーを振り上げて割り出す。体力、筋力を要する作業が続く。小柄な長谷川氏のどこから、それだけのパワーがあふれ出たのか…どんなことをしてもやり抜くと決めた信念の強さをあらためて知る。

「いまでも腕相撲は、若い者に負けないよ」

まるで原木のように堅く引き締まった右腕は、40年以上樽づくり一筋に歩んできた長谷川氏の勲章なのだろう。

ときには厳しくときにはおやじのように

いまは、木板は製材されたホワイトオーク材を北米から輸入して使っている。機械化も進み、作業時間はかなり短縮できるようになった。

「原木からの樽づくりを経験しているのは、もう長谷川さんだけ」と、弟子の一人である伊藤孝氏は語る。

「どんなに機械化が進んでも、基本的には一人での手作業。長谷川さんに指導してもらえるのは、本当に幸せなことです」

ときには厳しく、ときにはおやじのように親身に、長谷川氏は自分が体得した技、知識のすべてを次世代の職人たちに注ぎ込む。マニュアルはつくれない。弟子たちは師匠から生きた技を学びとるしかない。余市だけではなく仙台、栃木の各工場で、20代から30代の若者たちが日々、職人技を極めようと鍛錬を重ねている。

特に樽づくりの重要な工程である、チャーと呼ばれる内面をバーナーで焼き入れする作業は、蓄えた経験から得られる勘だけが頼りだ。焼きが足りないと木の香りが付きすぎ、焼きすぎると焦げ臭が付く。ブレンダーの指示を受



樽のメンテナンス作業。くさびを打ち込み、乾燥させたガマの葉を1本1本ていねいに差し込んでいく。はみ出した葉はちぎりとるが、側板の間に残った葉は水分を含むとふくらみ、ウイスキーの漏れを防ぐ役割を果たす。使い込まれたくさびもまた、職人たちの手づくりのもの

長谷川　清道／はせがわ　きよみち
1933年、岩内町生まれ。56年、ニッカウヰスキーに入社し、実家が桶屋であったことから、すぐに製樽へ配属された。ニッカの初代樽職人・小松崎与四郎から樽づくりの技術、知識を伝授される。60歳で一度定年を迎えたが、請われて復職。03年に退職した後も足繁く工場へ通い、後輩たちの指導にあたるとともに一般向けイベント等で樽づくりの経験を伝えている。

人の手から
人の手へと
受け継がれていくもの。

Kiyomichi Hasegawa

北海道遺産びと



イギリスのスコットランド樽職人の組合から長谷川氏に贈られた『世界のすぐれた樽職人』を称える盾。世界で15人、日本人としてはただ1人の選定。工場敷地内のウイスキー博物館に展示されている

けながら、焼き加減を調整する。色が付きすぎて、しょうゆのようなウイスキーになってしまったことなど、いまでは長谷川氏だけが知る貴重な記憶である。

最後に鏡と呼ばれる丸い蓋をはめ、樽の胴にあたる側板をタガで締め直して無色透明の原酒を詰める。そして、貯蔵庫へ。やがて琥珀色に輝くそのときまで、樽はウイスキーのゆりかごとなり静かに守り続ける。

そして、技は引き継がれる

2001年、長谷川氏にうれしいニュースが届いた。由緒あるスコットランド樽職人の組合から『世界のすぐれた樽職人』15人の1人に選ばれたのだ。

「うれしいですよ。でも、私一人がもらったものではないと思うし、一般の人にもこういう人間がいることを知ってほしい」と、賞状と盾は工場敷地内にあるウイスキー博物館に展示されている。

良い仕事をしたかどうか、結果は10年後、20年後にしかわからない。時間はただ流れるものではなく、着実に積み重なるもの。歳月を経た樽と再会し、その中で眠り続けた琥珀色のウイスキーを舌にのせる日、「ああ、樽職人をやっていてよかった」と至福のときを迎える。この一瞬に、すべての苦労は吹き飛ぶのだろう。

毎晩、お気に入りの『竹鶴17年』のグラスを片手に、長谷川氏は時間を遡るひとときへ。初代の樽職人・小松崎与四郎に厳しく仕込まれた修業時代、ニッカの二代目樽職人として認められ、木と対話し、樽をつくり続けた日々…気づくと半世紀が過ぎていた。

いまでも製樽工場で作業を見守り、指導する姿は、職人として生き続ける静謐な気高さを放っている。樽づくり名人・長谷川清道という〝50年もの〟の人生は、深く、まろやかに熟成のときを迎える。

そして、長谷川氏を『神様』と慕い、敬愛する三代目の若き職人たちへ、人の手でしかなし得ない技と揺るぎない信念は引き継がれていく。かけがえのない宝ものとして、永遠に。



ニッカウヰスキー余市蒸溜所

「ウイスキーを左右するのは、優れた自然と人の心構えだ」と述べた、ニッカウヰスキー創業者、竹鶴政孝。積丹半島の付け根に位置する余市をウイスキーづくりの理想郷とし、北の風土が育むウイスキーを頑なに守り続けてきた信念の人でもある。余市蒸溜所は、竹鶴によりニッカウヰスキー第一の蒸溜所として建設され、今もなお現役の蒸溜所として当時と同じ製造方法により、モルト原酒が製造されている。

Essay

本多 貢

北海道の地名と謎解き
―余市の黒川―



後志管内の余市町に3年ほど暮らした。町一番の繁華街が黒川町。JR駅前からニッカ工場を経て、余市宇宙記念館に続く国道沿いの一帯だ。その先に町役場がある。

『余市川右岸の黒川は黒田清隆北海道開拓使次官と宗川熊四郎惣取締の、左岸の山田は同じく開拓使の大山監事と黒田次官の姓のそれぞれ合成地名である』―と『角川版日本地名大辞典』に記されている。「広く知られている定説を書き、新説・自説は遠慮して欲しい」が出版社側の編集方針。仁木町を含む余市郡の執筆を依頼された私にとっては、かなり不本意な叙述になった。なぜか？

維新戦争で会津は徹底的に薩摩にいじめられた。父祖伝来の地を追われ、下北半島の荒れ地「斗南藩」に押し込められ、「逆賊流罪」の名目で明治2年小樽に送られた時の名は『会津降伏人』。兵部省の手で札幌原野開拓に向けられる予定だったが、翌年肝心の兵部省そのものが廃止され、行先不明のままで2年間も小樽で宙ぶらりんにされた。

災難続きだった会津武士団に、薩摩出身の樺太開拓使黒田次官が余市入植を世話した。小樽の開拓使本陣で武士団の血判書を受け取ったのが大山荘太郎、入植した4年6月に宗川団長が命名した。賊軍が故郷の地名を公然と付ける訳にいかない時代だった。政府高官にあやかって命名したとの口実を考え付き、全員が口裏を合わせた―のが会津魂。リンゴ武士との異名もある『二筋縄でいかぬ』会津武士が余市にありと思うのは私だけなのか？

会津若松市に出向いて神指町に残る黒川バス停を発見。会津史談会事務局長が「小原庄助さんの民謡で有名な東山温泉のある羽黒山。そこから流れる今の湯川は昔、黒川と呼ばれ、この付近一帯が黒川庄でした。つまり、若松と改名する前は黒川。会津藩は北海道の新天地に故郷の古名を付けたことになりますね」と言った。

北海道にアイヌ語地名があるとは言え、黒川はアイヌ語のヌプル・ペツ（水の色が濃い）が由来だとまでいうのは行き過ぎ。第一、命名当時に黒川という川は余市になかったんだから。



本多　貢／ほんだ　みつぎ　フリーライター、「北海道地名の会」会員。1932年東京都生まれ。東京外語大卒。56年北海道新聞社入社後、本社学芸部、東京支社外報、政治経済両部などで記者活動を続け、92年同社定年退職。以来、フリーライター、北海道地名の会会員として活躍中。「雑学北海道　地名の旅」「雑学北海道　自然の旅」「アイヌ語地名ファンブック」などの著書がある。札幌市在住。

齋藤均

黒松内町ブナセンター職員

さいとう　ひとし



Hitoshi Saitou

北海道遺産びと

自然と人のあいだを、縦横無尽にゆく森の案内人。

北限のブナ林

かんじきを履いて冬のブナ林をゆく

「冬のブナ林が好きなんですよね」。足跡一つない雪の上を〝かんじき〟で歩きながら、齋藤均氏はゆっくりと話す。「葉がぜんぶ落ちているから、空がよく見えるでしょ。月や星がきれいな夜もいいですよ」。時には立ち止まり、冬芽や鳥の鳴き声について丁寧に説明してくれる。「ここは尻滑りで行きますから」。穏やかな口調だが、有無を言わせずワイルドな体験もさせてくれる。久しぶりに雪まみれになって見上げた空は、ブナの白い枝と相まって本当にきれいだった。

「実は夏でもぽっかりと空が見える場所があるんです」。2004年9月、北海道を襲った台風18号が推定樹齢300~500年のミズナラの大木を倒したのだ。「黒松内小学校の2年生の子どもたちがこの倒れた木を見にきたので、差し込む光がまた若い木を育てるんだよって教えたんです」。その後、子どもたちはミズナラの大木のために劇を作った。「劇の中で『こんなに空は青かったんだね』というセリフがあって。子どもたちが森の動物の気持ちになりきれたからこそできたセリフだと思って、もう感動して涙が出そうになりましたよ」

南限から北限へ
研究者から案内人へ

齋藤氏が『黒松内町ブナセンター』の職員となったのは、2002年春。以前は、大学院で森林生態学を学び、東南アジアの熱帯林や日本各地の森林調査の後、南限域（太平洋側）のブナを研究していた。

偶然出会った人が黒松内に関係する人で「南限の次は北限はどうだ」と誘われ、「どこかひとつの場所に腰をすえて自然の仕事がしたかった」という思いと合致し、職員の公募に申し込んだ。「もちろんブナを町づくりの中心にすえていることに惹かれましたけど、おもしろいと思ったのは黒松内町では観光ではなく交流って言うんですね。観光だとお客さんになるけど、交流だと家族のようなもっと近しい感じがして。その感覚が自分に合うような気がしたんです」







1 尊敬する故渋谷吉尾名人が残してくれたかんじきの修理を一手に引き受けている　2 お気に入りのブナの木。最近は夜空とブナ林の撮影にも挑戦中　3 1.5mもの積雪のおかげで、冬はブナの冬芽も間近で見られる

齋藤　均／さいとう　ひとし　1972年仙台に生まれ、横手、鶴岡、弘前と高校まで雪国で育つ。横浜国立大学大学院で森林生態学を学び、東南アジアの熱帯林や日本各地の森林を調査する。趣味は焚き火、釣り、登山、スキー、野遊び。黒松内の自宅に薪ストーブを購入し、家の中で焚き火ができる日々を楽しんでいる。

齋藤氏が担当するのは「学校教育部」だ。海外の博物館では、調査研究・教育普及・展示・資料収集と4つの柱で役割分担されているが、日本では学芸員がすべてやることが多い。ブナセンターはニュージーランドのオタゴ博物館に範をとり、学校教育部を設けて専門職員を配置している。その4代目となるのが齋藤氏だ。ちょうど総合学習が始まったことも重なり、ブナセンターに野外教育を求める学校が急増している。中には学校から委託された旅行会社から問い合わせがくることもある。「先生と直接打合せをしたいとお願いしています。目的は何なのか、子どもたちに何を教えたいのか、先生と打合せや下見を繰り返してプログラムを決定するからです。ブナ林はもちろん、川も山も黒松内は教材の宝庫ですから、おおいに活用してほしいんですよね」。ブナに惹かれてやってきた若者は、すでに黒松内の人間となってしっかり根を下ろしているようだ。

この里を誇りに思う
森の仲間を増やしたい

日本のブナ林は東北地方に多く、北海道では渡島半島が分布域で黒松内はその北限となる。北限域最大のブナ群落である歌才ブナ林は1928年に天然記念物の指定を受けている。各地のブナ林をみてきた齋藤氏によると、黒松内は「なぜここがブナの北限なのか」また「今後さらに北進するのか、あるいは後退するのか」まだわかっていない「ドラマチックな場所」なのだそうだ。そんな貴重な自然林が、本州では標高500～1500㍍の山の中腹でしか見られないのだが、黒松内のブナ林は身近な平地にあり、いつでも誰でも見ることができるのだ。「でも、天然記念物だからとか北海道遺産だからとかじゃなくて、自分の目や身体でブナ林のおもしろさを知ってほしい。その上で、心から誇りに思える人が増えると、森を守る大きな力になると思うんですよ」

今後、齋藤氏は子どものガイドを育てていきたいという。子どもにガイドをされると大人はみんな真剣に耳を傾けるのだそうだ。すでに齋藤氏と一緒にガイドの手伝いをしてくれる子どもたちもいる。齋藤氏が子どもたちから呼ばれている愛称は名前の均からとった「きんちゃん」だ。先生でもお兄さんでも齋藤さんでもない。きっと森で遊ぶ仲間に近いのだろう。「みんなが大人になった時、いつも森に連れてってくれるきんちゃんって変な人いたよね、くらいに覚えてもらえば本望ですよ」。温故知新という言葉が好きだという34歳の森の案内人は、今日もかんじきを履いて子どもたちと森を歩いているだろう。



北限のブナ林

ブナは温帯の代表的樹種として北半球中緯度地方に広く分布する。黒松内の歌才ブナ林は、ブナの北限分布の特徴として、ブナの優先度が低く（全体の6割程度）、シナノキ、ミズナラ、シラカンバなどが混交。ブナの落葉したその層は高い保水力を持ち、「ブナの森は緑のダム」ともいわれる。その新緑や黄葉、灰白色の木肌の美しさが見直されるようになり、ブナ林を楽しむ人たちが四季を通して訪れている。

堀口一夫

昭和新山国際雪合戦実行委員長
ほりぐち　かずお



Kazuo Horiguchi

人 北海道遺産びと

ボランティアと選手と、実行する委員長と。

昭和新山国際雪合戦大会

最強のボランティアチーム 総勢400人のおもてなし

その日、空はきりりと晴れ渡った。全国の地区ブロック予選を勝ち抜いてきた総勢2000人の選手団が続々と入場。目の前には、赤茶けた山肌から白い噴気をたなびかせる昭和新山。突き刺すような寒気に、闘志がたぎる。午前9時、昭和新山国際雪合戦大会の開会が宣言された。花火の合図とともに勇者たちは、白銀のコートへと散って行く。

実行委員長である堀口一夫氏の姿を追ってみた。開会式会場から大会本部に戻ると、休む間もなく来賓の対応に忙しい。引きも切らずに来賓が訪れる。お辞儀、名刺交換、談笑。一人ひとりにていねいに応じる堀口氏。15分後、ダウンコートを着込んで、試合会場へ急ぐ。売店ボランティアの婦人会に、救護班のドクターに、車両整理係の方に、すれ違う人々へのあいさつを忘れない。熱々の〝雪合戦鍋〟をかきこんでいる選手にも「おいしいかい？」と声をかける。

とにかく、あいさつ。どこでも、お辞儀。直立不動でいることの堀口氏を見ることは、まずない。

「大会実行責任者になって10年

経ちました。責任者といっても、命令権があるわけでなし。私にできることは頭を下げること。この大会は、町ぐるみのボランティアと企業や団体の協賛で成り立っている。みんな余裕があって協力してくれてるんじゃなくて、忙しい合間をぬって、それぞれの役割を果たそうと頑張ってくれている。それを知ってるからね、実行委員の一人として自然に頭が下がりますよ」





1 ルールも、ヘルメットも、雪球製造器も、まちの人々が知恵を出し合い、試行錯誤を重ねて作りあげた。このまちで定められたルールは、国際ルールでもある　**2** 15年前の第3回大会告知ポスター。実行委員であった堀口氏自らが、広報宣伝に一役かった／ポスター提供 昭和新山国際雪合戦実行委員会

堀口　一夫／ほりぐち　かずお　1948年壮瞥町に生まれる。67年に北海高等学校を卒業後、堀口電気商会に入社。87年、堀口電気商会の法人化に伴い、代表取締役に就任、現在に至る。おもな団体歴は、75年から壮瞥町野球連盟会長、03年から壮瞥町商工会会長、05年から壮瞥町文化協会会長など。第9回昭和新山国際雪合戦より大会実行委員長。

選手たちの参加意欲も大会を推進する原動力

うなりをあげて雪球が飛び交う。まずは、強烈な雪弾の応酬戦。その間隙を突いて、いっきに突進し、シェルターに体を潜める選手。壁に張り付く選手をめがけてフライ攻撃も容赦ない。バシッ！ シェルターの角に当たって砕け散る雪球。流れ弾もギャラリー席に飛んでくる。目が離せない。雪球は飛ぶ、コーチの指示も大声で飛ぶ。素手で挑む選手は、もう指先まで真っ赤だ。長いようで短い1セット3分。90個用意された1セット分の雪球がみるみる減っていく。

「うまいチームは3分で90個の球を使い切るね。このチームは戦略がある。センターシェルターに2人張り付いているでしょ。援護射撃を受けながら、ダッシュして相手チームのフラッグを狙っていくはず」。堀口氏の解説で、思わず試合に引き込まれていく。訪れる前に想像していた試合ぶりは、シェルターに当たった雪球とともに見事に砕け散った。

これはまさしくスポーツだ。しかし、普通のスポーツとは少し違う。みんな真剣に遊んでいる、のだ。たかが雪合戦。されど、誰がここまで「まじめな雪遊び」に進化すると予測しただろう。スポーツとしての雪合戦は、今や海を渡り、遠く北欧でも国際雪合戦ルールにのっとり、YUKIGASSENヨーロッパ選手権が繰り広げられているという。

「第1回大会の公募数は70チーム。5～7チームも来てくれればいい。試合が終わったら、みんなで豚汁食べてお開きに、なんて軽く考えていたんだけど、いざふたを開けてみたら、来るわ来るわ、150チーム。第3回大会以降は190チームにまで膨らんで。今大会からは一般参加のレベルアップを図るため、地区ブロック予選を勝ち上がってきた精鋭152チームが、本大会に出場できる体制を整えました」。選手たちの参加意欲もまた大会運営の大きな原動力になっているといえるだろう。

知恵と行動力と雪球にかける思い

選手たちが昼食をとる大食堂へ行ってみた。階段わきに第1回大会からのポスターが展示されている。第3回大会のポスターに意外な人物を発見。雪球を両手に持ち、勝負を挑む眼光鋭い堀口氏、その人である。15年前の堂々たる体躯は、こう語っている「自分の住むまちのためなら、一肌脱ごうじゃないか」と。

「そんな大それたことじゃなく、乗せられちゃって。壮瞥町発祥のスポーツが、まちの自慢になればうれしいと思って。住んでいて誇りに思えるまちであってほしいからね。小さなまちだけど、活性化していくのも衰退していくのも、一人ひとりの知恵と行動にかかっていると思う」。知恵、そして行動力、その証しがこのポスターだ。実行委員長として肝に銘じているのは、「前例にないことをやる」。毎回が、知恵と行動力の真剣勝負だ。

今大会の開会式のあと堀口氏はこう語っていた。「開会宣言を聞くといつも、ああ、やっと俺の仕事が終わったって思う。大会の準備は前年の5月くらいからスタートしますからね。各方面への協力依頼に全力で走り回って、スムーズに開催できる環境を整えるのが私の役割。だから私のゴールは、この開会式」

しかし、ある意味ではゴールはまだ先のようだ。雪合戦を冬季オリンピック種目に。その〝夢〟の開催に向けて、山あり谷あり。堀口氏のロングランは明日へとつづく。



昭和新山国際雪合戦大会
子どもの遊びを、大人が真剣に競う冬のスポーツとして確立したことは、雪国北海道にふさわしい文化といえる。各地でブロック予選が行われたのち、150を超える精鋭チームが、昭和新山ふもとのセンターコート決勝大会に集結する。

川上将史

アイヌ口承文芸継承者
かわかみ　まさし



Masashi Kawakami

北海道遺産びと 人

カヤの匂い、
囲炉裏で木の燃える匂い。
僕のどこかが、それを覚えている。

アイヌ口承文芸

感動の再現ドラマ

「発表を終えた時点で正直なところ、だめだろうなと思っていたんです。完全にあきらめていました。また来年がんばって出場しようと」

青年はすっかり弱気になっていた。2003年、第7回アイヌ語弁論大会イタカンローの口承文芸部門で最優秀賞を受賞した川上将史氏。彼が同大会に初めて挑戦し、その発表を終えた直後の自身の感想だ。

「つい感情がたかぶってしまい声をうまくコントロールすることができなかったんです。ところどころ声がうわずってしまって。審査員のほうへ目をやると、何かササッとチヨクを入れているのが見え、ああ減点されちゃったなぁ」と、ガックリ肩を落として語る川上氏は、臨場感たっぷりにその場のシーンを再現してくれた。

「でも！　イケたんですよ。賞が発表されて、最優秀賞でしょう、もうその場でウォー!!って飛び跳ねましたよ。指導をしてくれた貝沢美和子先生に抱きついて『先生、よかったー、先生！』って。みんなで大騒ぎの大喜び。『すごいなー、オマエ』って言われて。ほんと本当に感動しました、あのときは」

川上　将史／かわかみ　まさし　1982年、平取町出身。道立平取高校を卒業後、札幌の北海道医薬専門学校へ。03年にふるさと平取に戻り平取町文化財課（平取町立二風谷アイヌ文化博物館）が主管した、「アイヌ文化振興クラスター基盤創出事業」に携わり、アイヌ口承文芸のユカラの習得に励む。同年、財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構主催の「第7回アイヌ語弁論大会イタカンロー」口承文芸部門で最優秀賞受賞。05年の同大会の弁論部門では優秀賞を受賞。04年から「アイヌ文化環境保全対策調査」の調査員を務める。今後も引き続きアイヌ文化に関わる仕事に携わっていきたいと願う。



二風谷のミニFM局、エフエム二風谷放送（愛称：FMピパウシ、76.1MHz）。二風谷の話題やアイヌ文化に関わることがら、アイヌ語のレッスンなどを放送。月1回のオンエアを心待ちにしているファンに支えられ、開局5年を迎える。06年4月からは、神戸市のミニFM局「FMわいわい」でも同時放送。インターネットで『FMピパウシ』で検索すると、ダウンロード方式で聴くこともできる。川上氏は進行スタッフの一人として参画

劇的などんでん返しのハッピーエンド。ドラマチックな展開と、川上氏が全身で語ってくれるその喜びように、思わずぐいぐい引き込まれてしまった。

川上氏とアイヌ口承文芸の出会いは、03年平取町で実施された『アイヌ文化振興クラスター基盤創出事業』がきっかけだった。「札幌から実家の平取に戻っていた時で、バイトを探してたんですね。そしたらたまたまクラスターという、アイヌの伝統文化を継承・再生させていくために推進されている事業で雇っていただき、そこで口承文芸とめぐり合ったんです。文化継承と一口にいっても、踊り、服、食べ物、ほかにもいろいろあって、いま全部は言い切れないのですが、その中でユカラ、口承文芸の勉強をしてみないかと博物館の学芸員の吉原秀喜さんに声をかけていただいたんです」

3種のアイヌ口承文芸

以前からユカラには興味があって？

「特にはなかったです。どうしても文化を継承しなくては、というのもなかった。この仕事をして初めてユカラというものを知ったのです。練習が始まって、参考になる文献とか資料とか調べていくうちに、自分の祖先がユカラをずーっと昔から、どれくらい昔からかもわからないくらい昔々から、ずーっとずーっと語り継いできたものだと知って、がぜん興味がわいてきちゃったんです。自分の祖先のことだから自分にも関わってくることでしょ」

ユカラは昔、どんなところで語られていたのだろう。「夜、囲炉裏を囲んで子どもたちに聞かせたり、寄り合いやお祭りなどの一興として語られていたようです。僕たちの地域ではユカラと言いますが、ほかの地域ではサコロペ、ハウキとも呼ばれています。ほかにも口承文芸には、カムイユカラ＝神様が語ったといわれる謡（うた）ですね、それにウウエペケレ＝昔話があります。でもウウエペケレは難しい」

というのは？　「ウウエペケレは、昔あったことを淡々と語る。自分の記憶をたどって、自分のしゃべり方で淡々と、抑揚がないというか。でもこれは日常的にアイヌ語を自由に操れないと語れない。だから難しい。カムイユカラは、サケヘという繰り返しことばが合間に入るのが特徴です。英語でいうリフレインですね。たとえば…

アンナホーレ　ホーレレホーレ

そのあとに、

ア・コロ・コタンポ

アンナホーレ　ホーレレホーレ

というふうに」。青年は、少し背すじを伸ばし、よく通る澄んだ声で一節を語った。風のように軽やかに流れ、リフレインしながら空に吸い込まれていく音節。今でもその声を耳の奥に感ずることができる。

ユカラの魅力のとりこに

「ユカラは、他の口承文芸とはまったく違うんです」と、川上氏は続ける。「まず、長い。カムイユカラもウウエペケレも長くて40～50分。ユカラは短くても40～50分かかって語られるんです。普通だと2時間くらい。いま確認されている最長のユカラは、語りきるのに3日間を要すると言われています。途中に少々のブレイクタイムはあるんでしょうけど、それにしても3日間！」

スケールが違うのですね。「そう、ユカラは壮大なストーリーが多いんですよ。だから、面白い。それと決定的な特徴は、レプニという拍子をとる棒があることです。ユカラは囲炉裏端で語られるものなので、

ユカラを猛練習。寝てからもユカラが夢に出てくる。



『萱野茂二風谷アイヌ資料館』に隣接し、チセ（家）が再現されている。川上氏は囲炉裏のあるチセでユカラの練習を重ねた。大会発表のときは、目を閉じ、そのシーンを思い描きながらユカラを語ったという

Masashi Kawakami

北海道遺産びと

実際僕もチセの囲炉裏で練習したんですけど、肩の力を抜きながら炉端を、コン、コンって叩いて調子をとって語っていく。英雄がいま空を飛んでいるとか、手ごわい相手をやっつけているとか、かわいいガールフレンドができて仲良くしてるとか、そういう描写を一定のリズムで表現していく。で、語り手の調子がよくなってくると、リズムも早くなってくる。周りの聴き手からも、オッ！ハッ！と、かけ声の合いの手が入る。ヘッチェっていうんですけどね。そのヘッチェが入ってくると、語り手もノッてきて、リズムが変わり、叩き方も力強くなって、ウォ～～～!!って、ね」

このノリのよさは「ラップミュージックにも通じる」という。「僕は、CDからJPOPとか覚えたりするんですけど、ユカラも同じように覚えました。リズムがあるから覚えやすいんですよね」

ユカラで夢のつづきを

覚えるのは大変なのでは？「繰り返し繰り返し、耳でしっかり覚える。同時に日本語訳も頭に入れていく。基本的には勉強に近いことだから、僕と同じ世代は面倒くさがってやらないかも。でも、新しいゲームを覚えるような、新しい漫画を読み始めるような、そんな軽い気持ちで始めるといいんですよね。まず僕がユカラを1曲まるまる覚えてみる。そのユカラを聴いて共感してくれた人が教えてっていったら、バンバン教えちゃうんだけどな」

学びながら楽しみながらの、ユカラの話は尽きない。「チセじゃない、普通の住宅で僕は生まれ育ってきましたが、チセのカヤの匂い、囲炉裏で燃える木の匂いがすごく好きなんです。なんだかとても懐かしくて、落ち着く。たぶん遺伝子に刷り込まれている、なぁんて思ったりしてるんですけど」

川上氏をとりこにしたユカラ。青年はなぜユカラと向き合い、どこに向かおうとしているのだろう。川上氏は長い時間をかけ考え、言葉を選び、そしてこう答えた。

「僕はアイヌ民族ですが、自分がユカラを語っているときに、あらためてそれを再認識することができるのです。僕はこれが一番得意、というより他はまったくできないので、この分野で自分の力を伸ばし、この文化を伝承していきたい。これはとても大事なこと。アイヌ民族が積み上げてきた文化は膨大です。もっと掘り下げて、一般の人にも広くわかりやすく伝えていきたい。自分の勉強にもなるし」

ユカラを猛練習したときには、寝てからも夢にユカラが出てきたという。川上氏のユカラの夢もまた果てしない。



アイヌ口承文芸

アイヌ民族が育んできた文化の一つ「口承文芸」。長い間途切れることなく語り伝えられてきた口承文芸の物語には、「英雄叙事詩」「神謡」「散文説話」などがある。比較的耳にする「ユーカラ」という言葉は、英雄叙事詩を指す呼び名の一つ「ユカラ」から来ている。アイヌ文化を保存し伝える団体や各地域では、口承文芸を始め、アイヌ文化を広く紹介し理解を深めるため、さまざまな取組みが進められている。

Essay

藤村 忠寿

北海道を外から見てみると



小さな村がある。その村の良さを伝えるには、いくつかの方法がある。

「ここは本当にいいとこなんだぁ。春になったら花がいっぱいに咲いてなぁ…」。村の美しい風景をバックに、地元のバァちゃんが語りかける。バァちゃんの朴訥な言葉と、そこに映し出される風景は、人々の「聴覚と視覚」に強く訴えかけ、「あぁ、いいところなんだな」と、人々は納得するだろう。

一方、その村を捨て、今は都会で暮らす若者が、ふと「あそこは、本当にいいところだった…」、そうつぶやく。そこに美しい風景や具体的な説明がなくても、その若者の短い言葉は、きっと人々の「感情」に訴えかけるだろう。「キミの故郷は、いいところなんだろうな…」。そこには淡い気持ちがいつまでも、ほんのりと残る。

『水曜どうでしょう』という番組は、北海道の番組でありながら地元を飛び出して、日本各地、世界各国を旅している。そして行く先々で、道産子の大泉洋はこう言う。「早く北海道に帰りたい」。

この番組を見る全国の視聴者は、大泉と同様、北海道という土地にいつしか「安息」を求めるようになった。番組ではほとんど北海道を紹介していないのに、彼らは時間が出来れば北海道にやって来て、心と体を休めて、そして帰って行く。

北海道には、いいモノがたくさんある。でもそれは、日本中の人がすでに知っている。伝えるべきは情報だけではないと思う。知識や情報だけの提供は、往々にして「自慢」に成り下がる。何十年も地元に住み続けたバァちゃんの言葉であれば人は耳を傾けるだろうが、それ以外の人間が人に伝えるためには感情が必要だ。

まずは、北海道に住む我々自身が、北海道に抱く感情。それをはっきり自覚しなければならない。「北海道はいいとこだ」。それはわかっている。でも、なぜいいと感じるのか？それを知るためのひとつの手段が、自分たちも外へ出ること。外から北海道を見る視線。それを持ってはじめて、北海道の良さを、人々に伝えることができると思うのです。



藤村　忠寿／ふじむら　ただひさ　1965年愛知県生まれ。90年北海道大学法学部卒、北海道テレビ放送（HTB）入社、東京支社編成業務部に配属。営業デスク業務を5年間経験した後、95年札幌本社制作部に異動。翌年、チーフディレクターとして『水曜どうでしょう』を立ち上げる。番組内では、ディレクターでありながらタレントよりもよくしゃべり、よく笑う。北海道ローカル番組としてスタートした同番組は、05年現在、全国31局で放送されている。

本間櫻

本間家四代目
ほんま　さくら



Sakura Honma

人 北海道遺産びと

最北の酒蔵で古さと新しさを繋ぐ、本間家四代目。

増毛の歴史的建物群

イメージを壊さずに補修は繰り返される

留萌線の終着駅、増毛。その駅前通りに、石造りや木造の歴史的建造物が並んでいる。タイムスリップしたような街並みの最後に見えてくるのが、明治15年創業、日本最北の酒蔵『国稀酒造』だ。風情ある佇まいとひんやりとした空気。訪れる人々を魅了する酒蔵は、その長い歴史の中で補修、改修を繰り返してきた。「歴史はお金で買えないもの、費用は投資と思うことにしています。建て直す時もなるべくみなさんの期待を裏切らないようにしたいので」と話すのは、国稀酒造株式会社の取締役であり、企画室長の本間櫻さんだ。

2000年から04年にかけて、仕込蔵、貯蔵庫、原料処理棟など18棟を4年計画で改修・新築した。その際も「酒蔵のイメージを大切にして、昔のものはできるだけ残したい」という要望を設計事務所に出している。例えば、百年以上前に建てられた石蔵は傷をつけないよう手で解体、その石を加工し、新築した事務所の外壁に使った。そんなこだわりや

本間　櫻／ほんま　さくら　増毛町生まれ。北星学園女子短期大学卒業。2003年、創業120周年を記念して情報紙「国稀かわら版」を編集・発行。創業者・本間泰蔵の手帳の解読など、貴重な歴史が網羅されており評判となる。好きなお酒は本醸造系の日本酒。



冬の仕込みが終わり春を迎える頃、しぼりたての新酒を待つ国稀ファンは多い。3月に開催する「国稀一杯やろう会～新酒まつり」の準備も企画室長である櫻さんの仕事だ

努力が評価され、2005年度の「北海道赤レンガ建築賞」に歴史的建造物として初めて選ばれている。

「ただ、古い建物と新しい建物がなじむにはまたかなりの時間がかかるのです。その繋ぎ目では、新しい建物の方が先に傷みだしたり。建物の維持・保存はなかなか難しいですね」

本間家130年の歴史と向きあった2年間

北海道遺産に選定されている「増毛の歴史的建物群」。その中核となる建物が旧商家丸一本間家だ。天塩国一の豪商と呼ばれ、明治から大正を駆けぬけた本間泰蔵。本間櫻さんはその四代目であり、97年に町が購入・復元するまで、旧商家に家族とともに暮らしていた。「住んでいる時はあまり家の価値は感じませんでしたね。重要文化財とか取りざたされるようになって、えっそうなの？　という感じで。そのうち、いろんな人が出入りするようになって、寝てる部屋まで見られたり、けっこう心労はありましたね」

櫻さんは札幌の高校に進み、大学、就職と一時増毛を離れる。町への譲渡が決まったことをきっかけに増毛に戻ってきた。「家から家財道具や古い資料をすべて運び出し、それを分類・整理するという大仕事が待っていたのです」

お正月に使っていた器が骨董品として値がつくことを考えると、どこに貴重な資料や道具があるかわからない。本間家130年の歴史と対峙する日々がはじまった。

「約2年かかりました。それでもまだ膨大な帳簿類や手紙の整理は終わっていません。そこをひもとくと、曽祖父・泰蔵の人生や謎の部分に迫れるのでしょうけど」。しかし、櫻さんには次の仕事、国稀酒造が待っていた。

「確かに家は残りましたけど、そこには私たちの暮らした歴史はもうありません。そんな気持ちを引きずりながらの整理作業だったので、心身ともに参った時もありました。でも、仕事をはじめて忙しくしているうちに気持ちの整理もつきましたね。今は、本間家を国稀の宣伝に利用しようと考えるくらいになりましたから」と笑う。

伝来の酒蔵を開放した新たな一歩

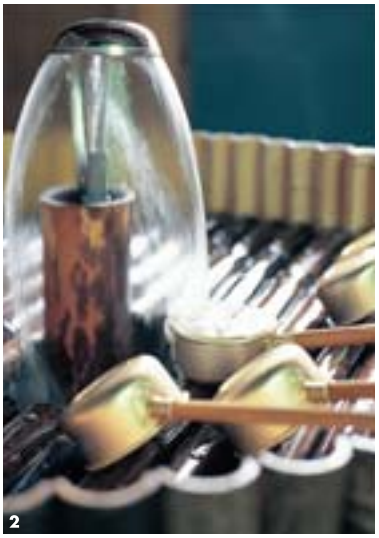
夏になると、国稀酒造は多くの観光客でにぎわう。そのきっかけとなったのは約15年前、店の前に止まった1台の観光バスだった。

「ガイドさんがここは見学できるのかと聞いてきたそうです。私たちは酒蔵を見学して何がおもしろいのかと思いますけど、観光客の方にはこの建物を見るだけでも驚かれるみたいで」。その後、観光バスが定期的に訪れるようになり、最北の酒蔵は全国的に有名になっていった。「お客様がたくさん来てくれるのは有難いのですが、私たちの本業はあくまでも製造業なので、建物ばかりではなくお酒を評価してほしいのです。昔ながらの作り方とかこだわりとか、国稀のお酒を知ってほしいので、冬の仕込みを見学できるようにしました」

本間泰蔵は呉服・荒物雑貨が軌道に乗ると、ニシン漁業にも事業を拡大する。その漁師たちに飲ませるために酒蔵を造ったと言われている。酒づくりは水が命。暑寒別岳の伏流水は商売人・本間泰蔵の心をとらえたに違いない。

女だから本間家を継がなくてもいいと思ったことはない。







1 お客さんから他の酒蔵の情報も聞けるので、なるべく時間を見つけて売店に立つ 2 暑寒別岳の伏流水は創業以来変わらぬ命の水だ 3 新酒の仕込み。芳しい香りが蔵の中に満ちている

Sakura Honma

北海道遺産びと

その水は今もこんこんと湧き出て、命の水を作り続けているのだ。

商売人の血は初代から まっすぐな性格は祖母から

櫻さんに本間泰蔵についてどう思うか聞いてみた。「よく聞かれるもので、いろいろ調べてはいるのですが、興味ということでは祖母の方がありますね。二代目の祖父が早くに亡くなったので、本間家を実質切り盛りしなくてはならなくて。陰では女帝とか呼ばれてたみたいですね」。そんな祖母を見て育ったせいか、女だから本間家を継がなくてもいいと思ったこともないそうだ。「姉と二人姉妹なので、男の子がいなくて大変ねと両親がよく言われてましたけど、不思議でしたね。男でも女でも仕事に責任を持つことに差がないのと同じだと思うのですけど。だからと言って私が継ぎますと声に出して言うのはいやで、曖昧にしてましたけど(笑)」

近頃、親戚からは祖母に似てきたと言われるそうだ。本人の分析では「意地っ張りというか、強情なところじゃないですかね」。しかし、企画室長としての発想は柔軟だ。冬は酒米でいっぱいになる米蔵も夏は空っぽになる。ならばと、古い写真や昔のてぬぐいなどを飾るギャラリーとして活用をはじめた。酒蔵でかくれんぼをしていた少女が、今はその酒蔵を切り盛りする商売人となった。まっすぐなまなざしの向こうに見ているであろう、古くて新しい酒蔵に期待したい。



増毛の歴史的建物群

レトロな街並みが往時の栄華を語る、増毛駅前。観光案内所としても利用されている1933年建築の老舗「多田商店」。駅前通の交差点に建つ「旧商家丸一本間家」は町が購入・復元し、2000年から一般公開している。やや西には国内最北の造り酒屋「国稀酒造」。さらに、高台に建つ増毛小学校は1936年建築で、今も子どもたちが元気に学び、文化催事などを通して多くの人に親しまれている。

Essay

橋本 登代子

先人の「おもい」を伝える街づくり



東北に住む民俗研究家の結城登美雄さんは10年かけて東北の小さな集落を歩き、土地の老人たちの話をまとめ「宮城の食べ物ごよみ」という、新聞の見開きと同じ大きさの暦を作りました。そこには食べ物、習わしなど、自然の中で暮らしてきた人たちの様子が丁寧に書かれています。

また、同じく東北・岩木山のふもとで暮らす佐藤初女さんという84歳のおばあちゃまの握るおむすびは、悩んだり迷ったりする人の心を救うほど、力のあるものだそうです。お米と水と海苔と具の気持ちを思って丁寧に握るから、初女さんのおにぎりにはぬくもりがあります。「時間をかけるということは、心をかけるということではないかしら」。そんな言葉が心に残りました。

2人の共通点は、特別目立つわけでもない日常の中に『本当がある』ということではないでしょうか。身のまわりにあるものを大切にし、役目が終わったかに見えるものでも変わらぬ気持ちで接していると、きっとそこから新しい力が生まれるのだと思います。

いま、札幌市東区の地域の人たちが、アマとホップの花による街づくりに取組んでいます。アマとは繊維の麻の原料となる植物で、うす紫の可憐な花をつけます。ホップはビールの原料となる白い花です。かつて、日本を代表する製麻工場やビール工場などがあった東区の歴史を大切にしようと、平成15年から活動が続けられています。今年もそろそろ、子どもからお年寄りまで多くの人が沿道に出て、花の苗を植えることでしょう。当然、作業の合間に昔の風景や暮らしぶりなども、語り継がれることと思います。

苗穂地区は〝北海道を代表する工場群と職人のまち〟として、すでに北海道遺産に選定されています。先人たちの遺したものを生かし、今に生きるわたしたちのおもいを吹き込む。それが〝本当〟を見失いがちな現代の私たちの生き方として求められていると思うのです。



橋本　登代子／はしもと　とよこ　フリーアナウンサー。札幌テレビ放送（STV）アナウンサーを経て、1989年㈲ボイスオブ　サッポロを設立。STVラジオ「TONちゃんのほっかいどう大好き」パーソナリティをはじめ道内各局の番組に多数出演のほか、シンポジウムのコーディネーター、司会、講演会、マナーセミナーなど幅広く活躍。（財）太陽北海道地域づくり財団　地域づくり助成事業選定委員就任など、地域振興への関わりも深い。

吉田裕二

れんが職人
よしだ　ゆうじ



Yuji Yoshida

北海道遺産びと

人生というれんがを丁寧に積み重ねる職人技の若き継承者。

江別のれんが

初めてれんがを積んだ日の感動はいつまでも忘れられない

「楽しいですよ、この仕事」

こぼれる笑顔に、まだ幼さが残る。吉田裕二氏、21歳。れんが積み職人として、江別市の『㈱畠山レンガ施工』で修業を積み重ねている。

17歳で、この世界へ。きっかけはほとんど偶然のもので、強い意志があったわけではない。体力的にも自信がなかったという。

「最初は、指示される作業をこなすだけで精一杯でした。それでも、任される仕事がちょっとずつ増えていき、おもしろくなってきて」

基本的には、れんが一つひとつをセメントと砂を混ぜたモルタルでつなぎ、手で積み上げていく地道な作業だ。北海道の厳寒期にはモルタルが凍ることもある。

れんがやセメントなど、現場で一度に運ぶ材料をだんだん重くしていき、自分でノルマを決めて体力づくりに励んだ。仕事から戻った後も、会社の倉庫でれんが積みの練習を繰り返す毎日が続く。

「初めてれんがを積ませてもらったときは、すっごくうれしかった」

若者らしい、素直な言葉に、その





1.2 れんがのまち江別。最盛期には15もの工場があったが、現在は北海煉瓦合資、米澤煉瓦、昭和窯業の3工場が稼動するのみ。米澤煉瓦の倉庫には、常時100万本ものストックがあるという。最近では、道庁赤れんがの煙突部分の補修に、ここのれんがが使われたとのこと
3 れんがをカッターで断裁するこの道5年の吉田氏。先輩たちの熟練の技にはかなわないが、細かな指示なしでも一通りの仕事はこなせるまでになった。仕事は楽しいという



吉田　裕二／よしだ　ゆうじ　1984年、札幌市生まれ。2001年、江別市の「㈱畠山レンガ施工」に入社。無我夢中で作業をこなすうちに、れんがの魅力に深く、強く惹かれる。こつこつとまじめに仕事に励む姿勢に、社長や先輩たちからの評価が高く、今後の成長が期待されている。休みの日は、大好きなロックを聴いたり、スポーツジムで汗を流している。

ときの感激の大きさがにじんでいる。以来、ますますれんがに惚れ込んでいく。一つひとつを積み上げるたびに、「きれいに、きれいに」と心でつぶやきながら、丁寧に仕上げていく。

挫折を感じるたびに いろいろな人たちに 支えてもらった

「何度もやめようと思いました」といまは屈託なく語る。

肉体的、時間的な大変さに加え、なかなか思うように技術が上達しないもどかしさを感じたり、仕事上の失敗に悩むことも多いという。それでも、いろいろな人たちに支えてもらいながら続けることで新たな自信が生まれ、前へ進むことができた。

先輩たちはアドバイスはしてくれるものの、手取り足取り教えてくれるわけではない。ベテラン職人たちの技を現場で見ながら、体得していくしかないのだ。志望しながらも、挫折していく若者も多い。江別市のれんが職人は年々減ってきている。

作業を一通り習得するのに、5年はかかると言われている。吉田氏は、今年でその時期を迎える。

「一人前なんて、まだまだですねぇ。この道30年の職人の技は本当にすごい。早くて、魂がこもっている。知識も豊富。少しずつでも近づきたいと思っています」

「ありがとう」 その一言が 何よりもうれしい

れんがに関わっていると、とにかく楽しいし、充実していると言う。一つの建物が完成したときの喜び、達成感が深く胸に刻まれ、この仕事を続けていくことに迷いはなくなった。

「れんがの建物は、重厚感があって、凛としているのにやさしい。時間や天候によって微妙に表情が変化するでしょ？　いくら見ていても飽きないんです」

若き職人は、少し照れながらもれんがの魅力を熱っぽく語る。住宅ができあがったとき、これからそこに住む人たちに「ありがとう」と言われるのが、何よりもうれしい。

「れんがの魅力を、もっと多くの人に知ってほしい。いまは外国産のれんがも多いけど、僕にはやっぱり江別のれんがが、しっくり手になじみます。そんな違いをわかってもらうためにも、いい仕事をして、人の心に残る建物をたくさん造りたいんです」

ほとんどの作業を一人でこなせるようになったいま、自分がやりたいこと、やるべきことが随分見えてきた。育ててもらったことへの一番の恩返しは、たくさんのことを吸収して早く一人前になることだと自分に言い聞かせている。

作業する横顔に、職人としての信念と誇り、そしてれんがに対する深い愛情が交差する。

人生というれんがを積み上げる吉田氏の手に、淡い春の光が降り注ぐ。



江別のれんが
開拓使は工場と倉庫の建設用として、また寒冷地の建物として、れんが建築を奨励した。これにより明治から大正期にかけて、れんが建築が道内に普及し、この時期に数々の名建築が誕生した。大正期以降、道内のれんが製造は現在の江別に集約され、道内最大のれんが製造地帯を形成。旧肥田製陶の煉瓦工場が往時の繁栄を伝えている。

青坂満

江差追分会師匠会会長
あおさか　みつる



Mitsuru Aosaka

北海道遺産びと

唄うことで、自分を慰める。明日も、生きていける。

姥神大神宮渡御祭と江差追分

浜風や波の音が染みつく生まれも育ちも鴎島

鴎島に立つと、さすがに風が強い。北前船でやってきた先人たちは、この風を受けて何を決意したのだろうか。「昔からタマ風が吹くと、漁師は恐れをなす」。江差追分の第一人者である青坂師匠は、まず風の話から始めた。タマ風とは、風速20メートルほどの勢いで吹く北西の風。羅針盤が指す北には魂が宿るといわれ、漁師たちはタマ風と呼んだ。一般的にはタバ風ともいう。「暗い海の水平線が白くなると、グワーッと、タマ風の音が聞こえてくるんだ」。その情感たっぷりの語り口は、まるで唄のようだ。

師匠の先祖は北前船で渡って来た能登の一族。代々鴎島に暮らす生粋の漁師である。「江差生まれの江差育ち、どこさへも出たことない」という師匠は、学校をさぼって浜辺でカレイやイワシに夢中になるような少年だった。浜風や波の音、潮の香りが体に染みついている。追分を意識したのは、4歳のとき。毎年9月には、鴎島に祀られている弁天さんの祭りがあった。父親の漁師仲間が集まり、宴会で酔いがまわると

青坂　満／あおさか　みつる　1931年、江差町鴎島に生まれる。47年、初代近江八声師の門をたたき、本格的に江差追分を習い始める。68年、第6回江差追分全国大会で優勝。74年、江差追分会本部会「鴎声会」を設立。01年、最高位の江差追分会上席師匠に認定。北海道文化財保護功労賞、地域伝統文化功労者表彰、北海道文化賞、北海道新聞文化賞を受賞。



江差追分の情緒をかもし出す「江差追分踊り」もある。文化・文政時代、芸妓たちが座敷で踊ったもので、アイヌ民族に似せた衣装を着て披露したといわれている。1868(慶応4)年に訪れた歌舞伎俳優の初代市川弁之助が鴎の飛び交う様などを創作し、いまに伝承されている

誰とはなしに唄が始まる。津軽民謡もでれば、賑やかな沖揚げ音頭もでる。その中で、満少年をひきつけたのは一人の漁師が唄う追分だった。やがて何を聞いても、追分しか耳に入らないほどのめりこんだ。しかし「このバカタレ。追分は大人になってから唄うもんだ」と、誰も教えてはくれない。

大島小島の間(あい)とる船は
ヤンサノエ
江差通いか　懐かしや

それでも小学生になると、こんな前唄を覚えた。前唄とは、追分の本唄を引き立てるためのもので、基本譜もなく自由に唄える。第二次世界大戦が始まり「追分どころではない」状況をじっとこらえ、初代師匠の門をたたくことができたのは15歳の初夏だった。

挫折しても逃げ出さない祖先の血が流れる

朝から晩まで追分を唄い続けた。海や山に向って、時には井戸の反響を利用して稽古した。声が風や波の音に聞こえ始めた頃、家族がようやく文句を言わなくなった。周囲の期待を集めながらも優勝できず、挫折したこともある。それでも、追分から逃げ出さなかったのは、つらい思いをしても蝦夷地に留まった祖先の血なのかもしれない。

前唄
国を離れて蝦夷地ヶ島へ
ヤンサノエ
幾夜寝覚めの浪まくら

朝な夕なに聞こゆるものはネ
友呼ぶかもめと浪の音

本唄
かもめの鳴く音に
ふと目をさまし
あれが蝦夷地の山かいな

後唄
なにを夢見てなくかよ千鳥ネ
ここは江差の仮の宿

この追分は蝦夷地で一旗揚げようと、大しけを乗り越えてやってきた人々の唄である。「小さい頃から祖先が苦労した話を聞いて育ちましたからね。陸が見えたところで波にのまれて逝った人々の無念もあるはず」と、先人たちへ思いを馳せる青坂師匠。現役最高位の上席師匠就任後も、江差追分会館の道場で観光客を相手に追分の歴史や基礎を指導する。独特の記号が並ぶ江差追分の基本譜を指しながら「はい、波が寄せては返す」「さぁ、一番高い波に船が上がった」「ああ、見えてきた、見えてきた」と、波のように唄うコツを教えてくれる。その海を感じさせる節回しと、飾らない人柄に、どれだけの人が虜になったことだろう。

山の調べが荒波に揉まれやがて海の唄になった

江差追分のルーツは諸説あるが、どれも海の唄ではない。その一説に、江戸時代、信州の浅間山の麓を行き交う馬子たちに唄われた「馬子唄」がある。青坂師匠は唄を交えて、流れるようにその移り変わりを説いてくれた。

碓氷峠の権現さまは
わしが為には守り神

この唄が宿場の飯盛り女の三味線にのせられ「追分節」の名で諸国に広まった。越後に伝わった追分節は、やがて北前船に乗って江差へと運ばれた。山の調べが海の荒波に揉まれるうちに海の唄に変化したのだ。

小諸出て見りゃ　浅間の山に
今朝も三筋の煙立つ

これは小諸市に古くから伝わる小室節だが、追分節の元歌ともいわれる。古くから馬の飼育をしていた御牧ヶ原から朝廷に馬を献上する貢馬(くめ)の道唄であり、モンゴル民謡に似ているという研究

芸者衆の姿は消える。しかし追分だけはなんとか残さねば。

Mitsuru Aosaka

北海道遺産びと



ウミネコはクンニャークンニャーと鳴く。オオセグロカモメはウンガララーウンガララーと鳴く。ニシンを追って「春がきた〜、春がきた〜」って、すごい勢いで鳴いた。「そんな時代、ちょっと見てみたい気がするね」と、青坂師匠

者もいる。大陸から多くの渡来人がやってきた歴史もあり、モンゴルの丘陵と日本海の波の音が重なると、またひとつロマンが広がる。

追分と謙良節を合わせて、独特の音調を持つ江差追分を誕生させたのは、寛政時代に盛岡から渡って来た琵琶の名手、座頭佐之市だと伝えられている。

「追分はね、ソーラン節や沖揚げ音頭と違って、花街の芸者が唄い広めたもの。船頭衆が芸者遊びをしながら唄ったものも多く、艶っぽい意味が隠された歌詞もあるんですよ。千鳥なんて夜は飛ばないでしょ。あれは女性なの」と、師匠は悪戯っぽく笑う。

花街で唄われていた頃は、追分が十人十色でもよかった。やがてニシンがとれなくなると芸者衆の姿は消える。追分だけは、なんとか残したい。しかし、一般に普及するためには、曲節の基準を定める必要がある。こうして1909(明治42)年、正調江差追分が決められた。

わずか27文字の唄を5、6年かけて覚える

松前江差の鴎の島は
地から生ぇたか浮島か
忍路(オショロ)高島およびもないがせめて歌棄(ウタスツ)磯谷まで

本唄には「かもめの鳴く音に」の他に、北前船の帆柱が波に揺れるようすを唄ったものや、ニシン漁に出る男たちとの別れを切なく唄ったものがある。「七節七声」といって、切らずに一息で唄わなければならない。たった27文字を2分30〜40秒かけて、じっくり情緒を出して唄う。「流行歌がどんどん出ている時代でしょ。江差追分は5、6年かけて、一つしか覚えられないんだから。それはゆるくないですよ」。想像以上に忍耐の唄である。それでも追分を習いたい一心で、九州や四国からも江差へやってくる。毎年開催される全国大会の出場者は400人。江差追分会の支部は、ブラジルやサンフランシスコなど海外にも広がり、会員数は4023人。

これだけの人をひきつける江差追分の魅力はどこにあるのか。「それは、メロディだね。困ったときも、怒ったときも、心を休ませてくれる。喜怒哀楽の中に追分はある。その人が背負ってきた人生が唄に出るでしょ。唄うことで自分が慰められるんですよ。涙を流して、明日の糧にする」。そう答えた師匠の背中は、言葉にできない哀しみを背負っているような気がした。

時代の流れとともに、江差追分が変わっていくことを誰も止めることはできない。昔の唄のイメージを知る人も残り少ない。「唄も食べ物と同じ。終戦後に配給されて初めて飲んだパイナップルジュースのあの味。何でも手に入る今の人に伝えることは難しい」。それでも師匠はあきらめない。この世に情緒があるかぎり、昔の唄をそのまま伝えていくことの意義を信じている。



姥神大神宮渡御祭と江差追分

姥神大神宮渡御祭の起源は360年前にさかのぼる。その年のニシンの豊漁に感謝を込めて行われた古くからの祭りで、現在も毎年8月9日から11日、まちは祭り一色になる。江差追分は中山道の馬子唄をルーツに、北国の厳しい風土にもまれながら、多くの先達に唄い継がれてきた。日本国内だけでなく、海外にも多くの愛好者を持つ。いずれも、はるか遠い江差のニシン景気を今に伝える貴重な文化である。

ひとつの宝物が人を引き寄せ、仲間ができた。
仲間たちの思いや結びつき自体が、宝物となった。
好きだから、集まる。集まると、もっと好きになる。
つながるという幸せ力。
北海道遺産は、そんな力によって支えられている。



特集❷グループ篇

北海道遺産びと

NPOひがし大雪アーチ橋友の会

旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群



「北海道自然歩道・東大雪の道」は、鉄道資料館からメトセップ地区に至る全長約8kmの散策コース。訪れる人々は、アーチ橋で記念写真を撮ったり森林浴を楽しんだりと、歴史と自然を堪能している。また、「友の会」ではトロッコの設置（写真下）など士幌線跡を楽しむためのコンテンツを積極的に整えている



1999年の発足前から、アーチ橋を見守り、はぐくむ。

アーチ橋の解体危機を救った「保存する会」

『ひがし大雪アーチ橋友の会』（那須襄太郎会長代行、会員236人）は、1999年から、アーチ橋の保存・活用運動に取組んでいる。

事の発端は、97年7月。アーチ橋解体の危機を前に、『上士幌鉄道アーチ橋と産業遺産の保存活動』というシンポジウムが上士幌町で開催され、北海道産業考古学会の研究者たちが、「アーチ橋の保存運動に乗り出してほしい」と地元に要請した。これを受け止め、『ひがし大雪鉄道アーチ橋を保存する会』が発足した。現在の『友の会』の前身だ。

『保存する会』は、署名運動や保存活用策の提言などを活発に展開。この運動が関係機関を動かし、98年10月、旧国鉄清算事業団が上士幌町に橋梁群と線路跡地の一部を譲渡する契約が結ばれ、保存が決定したのだった。

そして、保存決定から7年目の夏。アーチ橋と線路跡が活用されることになった。

活動8年目にして実らせた自然散策路

05年7月、士幌線跡を利用した「北海道自然歩道・東大雪の道」の供用がスタートした。97年のアーチ橋保存活動から数えると、じつに8年目の実り。アーチ橋の具体的な活用のはじまりである。

「供用開始となった最初の秋の連休中は、たくさんの人々が線路跡を散策し、東大雪の自然とアーチ橋の文化財としての素晴らしさを楽しまれていました」と話すのは、『保存する会』の頃から中心的な役割を担う、『友の会』事務局長・角田久和氏。平成18年度には、北海道開発局により三の沢橋梁付近に障害者用スロープを整備するなど、体の不自由な人も楽しめる自然散策路をめざす。

これからはソフト面の活動も活発に

『友の会』では、太陽北海道地域づくり財団やニトリ北海道応援基金の助成を受け、駅名標やレールを設置するなど、士幌線跡の鉄路再現事業も行っている。

「この地を訪れるみなさんに、いろいろな形で士幌線跡と触れ合っていただけるよう、魅力的なコンテンツを今後も整えていく予定です」とは角田事務局長。

さらにこれからは、「アーチ橋工事写真集」の編さんや「北海道自然歩道・東大雪の道」の散策案内作成など、ソフト面の取組みも強化し、アーチ橋の魅力を全国に発信していく姿勢だ。

白滝悠遊塾

オホーツク沿岸の古代遺跡群



世界的にも珍しい黒曜石の露頭を目当てに、毎年多くの人が白滝村に訪れている。写真右は、2005年に開催された「古代ロマン体験セミナー」での露頭見学の様子。セミナーでは、石器づくり（写真下）をはじめ、白滝郷土館での遺跡勉強会なども行い、黒曜石の魅力をいろいろな角度から伝えている



古代遺跡群の活用で、「遺産」の魅力を次世代へ伝える。

2万年前を味わえる「古代ロマン体験セミナー」

『白滝悠遊塾』は地元NPOや教育委員会、同好会と連携して、オホーツク沿岸古代遺跡群のひとつである白滝遺跡群を活用した「古代ロマン体験セミナー」を実施している。

この体験セミナーは、親子での参加も可能。世界的にも珍しい黒曜石の露頭を探索し、自らの手で採取した原石で、石器づくりを体験することができる。さらに、完成した石器で、実際に食材を加工し、料理にも挑戦。2万年昔の食を体験できるのだ。

子どもたちが、2時間以上も真剣に取組んでいる姿を目の当たりにしたお母さんから、「勉強も同じように一生懸命だったら」と感嘆の声が上がるほど、石器づくりは子どもたちを魅了している。

北海道の宝から日本の宝へ その魅力を全国へと伝える

「古代ロマン体験セミナー」での黒曜石は、子どもたちを魅了するばかりでなく、全国からも注目されている。

2005年8月、NHKの番組「ほくほくテレビ」が、セミナーを取り上げ、黒曜石と石器づくりに真剣な小学生たちを全道のお茶の間に紹介した。中継後は、「黒曜石の露頭を案内してほしい」との問い合わせが倍増し、『悠遊塾』ではこれを受けて、つねに露頭見学ができる態勢を整えている。

さらに、『悠遊塾』では、05年に文化庁が主催した旅プラン公募「わたしの旅～日本の歴史と文化をたずねて～」に、白滝遺跡群を中心とした「旧石器時代を体験する旅」を提示。応募総数800件から選ばれた105件の魅力的なプランの中に名を連ねるだけでなく、たった9件の特別賞にも選定された。プラン内容には、『悠遊塾』を中心にした2泊3日の体験コースが含まれており、旅を通じて、北海道遺産の魅力を伝えていく。

『悠遊塾』では、今後も「古代ロマン体験セミナー」の開催を続ける。また、夏期間は、夏休みなどを考慮して、露頭見学・黒曜石採取・石器づくり・遺跡物展示場見学がつねにできるよう態勢を整えていく予定だ。

「これからは親子での体験に力を入れていきます」と奥山壽雄塾長。遺産を活かした活動で、親子の絆や子どもの心をはぐくんでいきたいと続けた。

かがやけコトニ実行委員会

屯田兵村と兵屋



2005年8月27日に開催された「かがやけコトニ～屯田兵の里まつり」は、屯田兵パレードからスタート。琴似のまちは、たくさんの見物客で賑わいを見せた。まつりには、地元の子どもたちも積極的に参加。写真下は、琴似小学校の児童による壁新聞「屯田兵の歴史」



琴似のまちと人を想って、「屯田兵の里まつり」を企画・開催。

集客よりも地域住民の参加を大事に

琴似屯田兵入村130周年と「屯田兵村と兵屋」北海道遺産選定を記念して、2005年8月、「かがやけコトニ～屯田兵の里まつり」が札幌市西区琴似を中心に開催された。

主催したのは、琴似連合町内会などの地元町内会のほか、琴似屯田子孫会などの市民団体、琴似小学校や二十四軒小学校、琴似商店街、JR琴似駅や三角山放送局などの企業からなる、『かがやけコトニ実行委員会』。

琴似屯田兵の記念行事は、50年目・100年目にも行われてはいたが、いずれも行政が主導だったのに対し、今回のまつりは、地域主体で企画。しかも、よそからどれだけ人を呼べるかを意識し企画するイベントが多い中、このまつりは、集客よりも地域住民の参加に重点を置き、構想を練ったという。上田一男実行委員長は、「参加を大事にしたのは、先人の歴史を知ることで、この地に住む人が、もっと琴似を好きになってくれればと強く思ったからです。そして、琴似に住む子どもたちが、将来ほかの場所で活躍しても、自分のふるさとはここだと思えるような地域にしたいと願うからです」と話す。

地域住民の参加は、大人500人、子どもを合わせると約2000人にも及び、文字通り、まち全体で盛り上げに協力した歴史文化イベントとなった。

屯田兵の歴史は琴似の未来を明るく照らす

「かがやけコトニ～屯田兵の里まつり」の催しのひとつである琴似の歴史展「里の歩み そして夢」は、琴似在住の教員OBが中心となって作り上げた。一方、「浄恩寺」でのジャズコンサートは、「西区ボランティアもりあげ隊」の参加があってこその催し。「里まつりの成功は、地域の人と人のつながりなくしては、果たせなかった」と上田実行委員長が言うとおり、計25にも及んだ催しの影には、人のつながりが確かに見える。

まつりの成功を機に、次なる気運も、もう出始めている。上田実行委員長は、「20年後の150周年記念は、次の世代が主役。今回のまつりで発見した人のつながりを未来へ向けて続けていく」と力強く話す。

兵屋周囲のイボタ生垣を、地元町内会が剪定することになった。小学校と町内会が協働で郷土史の本を編さんする予定も立てられている。琴似の人のつながりは、まつりを終えた後もしっかりと健在だ。

Essay

渡邊 俊博

「オライサン」で元気



ジョン・フォード監督の映画に『わが谷は緑なりき』（1941年）がある。ウエールズ地方にある炭鉱町の炭鉱夫一家の物語で、ストライキや落盤事故の場面に、つい、ぼくの古里の炭鉱「夕張」を思い出し胸が熱くなってしまう。

夕張は空知管内の旧産炭地の「炭鉱遺産」として北海道遺産に選ばれ嬉しくもあるが、どの炭鉱も繁栄当時の面影はなく人口も減り、ズリ山には木が茂り、炭鉱関連施設もほとんど壊されている。観光資源として生かしても、施設の設備や維持管理が大変らしい。せめて今の子供たちに、「この黒い石（石炭）は燃えるんだよ」と伝えておこうかなあ。

ぼくはよく道内を旅する。市町村合併が進みまちの数も減り、いまひとつ元気なまちが少ない気もする。小さく背中を丸めていてはアカン。北海道遺産もいいが、「オラがまち遺産」をつくるべ、の声。これを『オライサン』という（いわないかも）。

守り伝えたいまちの景色や建物、特産品、人物などで盛り上がる。すると、近隣のまちから「なんだべ、面白そうだな」と人が集まり、それが各市町村にどんどこ広がって、いつの間にか元気な北海道に？なればいいねえ…。例えば「まちをきれいにするべ」という心だけでも、もう大切な遺産なんですよ。

どんどん汽車に乗って旅をしよう。窓の景色で季節を感じるなんていいもの。

田んぼの緑、夕焼けの海辺、収穫間近のゴショイモ畑、吹雪の町並み、魚臭い港町、紅葉の雑木林、学生が多い終着駅、車内の年寄りはみんな知り合い、パソコンの会社員、駅弁をたべる家族連れ、肥った中年のいびき…ぼくはウイスキイを舐めながら文庫本の活字を追う、が、そのうちに眠ってしまう。

たまに車を置き（排気ガス減）、ローカル線に揺られよう。雑草が茂る無人駅のホームに独りぽつん立つと、今そしてこれからの北海道に何が必要なのか、みんなで何ができるのか、がみえてくるかもしれない。



渡邊　俊博／わたなべ　としひろ　道中作文画家、デザインスタジオ・ズウ代表。1948年夕張市生まれ。夕張北高卒業後、札幌、室蘭の印刷会社、広告代理店勤務を経て79年デザインスタジオ・ズウ設立。古い町への旅をこよなく愛し、ほのぼのとした人情味あふれる作品を数多く描き続けている。旅のスケッチ展を開く一方、JR北海道PR誌の連載や「北海道おいしいもの見つけ旅」（北海道新聞社刊）などの著書も。札幌市在住。

苗穂駅周辺まちづくり協議会

札幌苗穂地区の工場・記念館群



協議会が行った「苗穂産業遺産モデルツアー」には、たくさんの地域住民が参加。これはサッポロビール博物館内での見学風景（写真右）ガイド養成研修会に出席する地域住民たち。学習活動にも積極的だ（写真下）



開拓から続く「産業のまち」に、もうひとつの歴史が刻まれる。

産業遺産を活用した新しいまちづくりを展開

サッポロビールや雪印乳業など多くの工場が集積し、古くから「産業のまち」として栄えた札幌苗穂地区。近年、再開発の動きが活発化しているほか、地区内の工場・記念館群が北海道遺産に選定されるなど、特色ある産業遺産を活用した新しい都市観光エリアとして注目を集めている。

「産業遺産を活用した新たなまちづくりを展開しよう」。この地の近隣住民・企業などでつくる『苗穂駅周辺まちづくり協議会』では、内閣府都市再生本部の「平成17年度全国都市再生モデル調査」に応募。全国587件もの応募の中から、見事モデル地区に選定された。

自分たちのまちを自分たちの手で

この調査事業は、地域が自ら考え、自ら行動する都市再生活動を、国が予算や制度の面から支援するというもの。「産業遺産を活用した都市観光の展開とコミュニティビジネスの創出」と掲げた同協議会の応募テーマは、苗穂地区内の産業遺産群などを活用したまちづくりを地域が主体となって取組み、都市観光エリアとしての発展をめざすという内容だ。具体的な事業案として、産業遺産を軸としたツアープログラムの企画、ガイドマップの作成、ツアーガイド養成研修の実施などが挙げられている。

これまでに7回のワーキング会議を行い、具体的な話し合いを重ねてきた。また、ボランティアガイド先進地の視察や、実際に活躍するガイドを講師に招いたガイド養成研修会も行っている。参加した地域住民からは「まちを見直す、よいきっかけになった」という声や「ガイドをしてみたい」「この遺産を大いに語り継いでいきたい」という声も聞かれるなど、活動に対する興味が高まっている様子だ。

魅力ある観光地として住みよい生活の場として

2006年3月には、協議会や地域での取組みなどを紹介するホームページ「はばたく苗穂」が完成。雪印乳業史料館、札幌村郷土記念館、サッポロビール博物館を巡るモデルツアーも開催され、地域住民が多数参加した。この3月には札幌市により「苗穂駅周辺地区まちづくり計画」が策定された。06年度以降は、JR苗穂駅周辺の具体的な整備の検討も開始される。

「観光エリアとしての発展はもちろん、住みよいまちをつくっていくために活動していきたい」と協議会のメンバーは口を揃える。自分たちが暮らすまちへの愛着と、高い行動力を持つ同協議会。地域活性化に向けた今後の活動が注目されている。

登別市観光ボランティアガイド会

登別温泉地獄谷



外国人ツアー客にも対応（写真右）。ガイドの予約は特に必要ないが、12名以上の団体の場合は、事前に申込みが必要。硫黄の香り漂う雄大な景観から、環境省の「かおり風景100選」にも選定されている



1万年前の火山活動がくれた「地獄谷」の恩恵を世界へ。

地域活性化を担うボランティア・パワー

赤茶けた岩肌の裂け目から、もうもうと立ち上がる噴煙。あたりにたちこめる、むせ返るような硫黄のかおり。「地獄谷」を間近に見下ろす展望台で揃いの半被を身にまとい、訪れる観光客に明るく声を掛けているのが、『登別市観光ボランティアガイド会』のメンバーたちだ。

会員数は現在54名。登別市観光ホスピタリティ推進協議会が主催する、ガイド養成講座を受講・修了した市民がその対象となる。平均年齢は66歳で、そのほとんどが定年退職を迎えたお父さんたちや、子育てを終えたお母さんたち。

毎年5月1日から10月31日までの約半年間、全国から訪れる観光客と散策路を巡りながら、地獄谷やその周辺を案内するのが彼らの役目だ。

新たな発見や感動の瞬間に立ち会える喜び

登別のように一カ所で多種類の泉質が湧く温泉地は、世界的にも珍しい。その源泉である地獄谷を訪れる観光客は、その迫力と自然の神秘に誰もが圧倒される。

「間欠泉を間近で見たときのお客さんの表情や歓声に立ち会えるのがなによりも嬉しい」。一度でもガイドを経験した人は、皆口々にそう話す。「登別温泉に行って本当によかった」「私もぜひ行ってみたい」、そう思われるような案内を。地元を愛する彼らの思いは温かいもてなしの心となり、訪れる観光客の元へ届けられる。

世界の人々が相集う「理想郷」をめざして

登別市が「国際観光レクリエーション都市」を宣言してから20年。1996年から行われた、台湾をはじめとする観光プロモーションの成果は徐々に実を結び、近年、登別温泉の外国人宿泊者数は全体の10%にまで届きつつある。「海外からの観光客にも、地獄谷の魅力をしっかりと伝えたい」。シーズンオフに外国語の講習会に参加するなど、メンバーたちは語学のスキルアップにも余念がない。かけがえのない自然やすばらしい景観を、ここから世界に発信することが大きな目標だ。

06年度には、登別観光協会の主催で「夜の地獄谷」にスポットを当てた、新しい事業の展開が予定されている。「鬼火が誘う地獄の谷」と題したこの企画は、鬼火に見立てた灯りや花火、和太鼓などの演出により、普段とはひと味違った地獄谷の表情を楽しんでもらうのが狙い。PR活動など様々な場面での協力に、ガイド会も応じる予定だ。

結成から17年。この地を訪れる観光客や地域との関わりの中で、ガイド会メンバーのモチベーションはますます高まっている。

認定NPO法人 霧多布湿原トラスト

霧多布湿原



湿原を歩くための木道整備もメンバーの大きな仕事（写真右）。05年の整備は学生ボランティアのみなさんが手伝ってくれたおかげで、効率よく作業を進めることができた。作業を終えて充実感いっぱいの表情（写真下）



豊かな水の大地に広がる、ナショナル・トラストの輪。

この風景を残したい その思いが出発点だった

美しい霧多布湿原の姿をそのまま次代に残そうと、湿原民有地の買上げ保全に取組む団体がある。『認定NPO法人霧多布湿原トラスト』だ。

「子どもの頃から親しんできたこの風景を、来年も再来年も見続けていたい」。1986年、地元の有志10人が設立した『霧多布湿原ファンクラブ』がその始まり。湿原周辺1200haにも及ぶ民有地を所有者から借受けることで、開発の手から湿原を守るのが目的だった。

ナショナル・トラストの手法として一般的な土地の「買取り」ではなく、「借りる」というユニークな手法は口コミで全国に広がり、結成1年で会員は1000人を超えた。声高に自然保護を訴えるのではなく、ただ「ここが好き」という理由で参加できる気軽さが、人々の共感を呼んだのかもしれない。

「地元の有志以上に、霧多布湿原を好きだといってくれる人がたくさんいる」。湿原の魅力は多くの人々の感動を呼び、その大きな反響に地元のメンバーたちは感動した。

NPO法人への転換 広がりゆく保全地

結成から15年目、大きな転機が訪れる。地主から、土地の買取りを望む声が高まってきたのだ。しかし、その責任や継続性を考えると、購入に踏み切ることはできなかった。その対応策として、99年に一度クラブを解散。翌年、NPO法人へと転換した。

04年には、寄付が非課税となる北海道初の認定NPO法人へ。個人会員はいまや2500を超え、91の法人が活動を支援している。地道な活動の輪は地域にも徐々に浸透し、05年10月現在の保全面積は320ha、民有地全体の約27%にまで広がった。

ラムサール条約の登録や北海道遺産選定など、トラストの活動は広く知られるようになり、また多方面からも高く評価されるようになった。

一歩、一歩 地域と同じリズムで

「一見、困難な道程に思われるかもしれませんが、実はそれほどハードルが高かったとは感じていません」と、語るのは、クラブ創立時からのメンバーでもある三膳時子理事長。肩肘張らず、地元のリズムに合わせながら活動を行うことで、周囲も好意的に受け入れてくれるようになったのだという。

つい先日、湿原の土地を所有する地主から、土地を譲りたいとの連絡があった。引渡しを終えた後、その地主はこう話したという。「他の地主さんからも土地を譲ってもらえるよう、私の名前を出して宣伝しなさい」と。

全国の有志が支えるナショナル・トラスト運動の輪は、道東の小さな漁師町に確実に浸透している。

Essay

岡本洋典

雨竜沼湿原のファンを求めて



2004年の北海道遺産、05年のラムサール条約湿地登録と、この1、2年で雨竜沼湿原は随分と知名度を上げました。この湿原を長く見守ってきた者として、なによりも嬉しい限りです。しかし、日本や世界という、より大きなステージを見回したとき、雨竜沼湿原の認知度はそう高くはありません。というよりほとんど知られていないというのが現実です。もちろん、国内の研究者や登山愛好者の間ではそれなりに認知されつつありますが。

大切な自然環境を保全する、未来に守り伝えるという大義を全うするにはたくさんの人々に認知されることがどうしても必要です。それは、存在・価値を含めて、その環境を大切に思ってくれる人たち、つまりファン層の存在が必要不可欠です。

日本の山地湿原を代表する日光国立公園の尾瀬は、関東・関西に多数の尾瀬ファンを抱えており、それらの声が後押しとなり、日本の自然保護活動の先駆的な舞台となって今日に至りました。それは学識者の発言に留まらず、一度は尾瀬に足を運び、山上の楽園ともいえる自然美に心ひかれた多数のファン層の声が大きな力となったのです。

雨竜沼湿原は札幌からは日帰り圏ですが、それでも尾瀬のファン数からすれば比べる余地はありません。年間50万人ともいわれる登山者を迎える尾瀬は、それだけ多くのファンを有する証です。もっともこんなに多くの人が雨竜沼湿原に来られては困りますが。

2006年4月から、地元雨竜町の道の駅に雨竜沼自然館がオープンします。手前味噌になりますが、当方の写真作品を展示し広く雨竜沼湿原を紹介しようという施設です。見ること、見せることから湿原への関心の糸口を発掘したいと思います。展示だけではなく、定期的な湿原学習のための講演会や学習登山、雨竜沼湿原や北海道の自然を表現した映像ショーやミニコンサートなども実施予定です。この町に暮らす人とこの町に足を運ぶ双方の人たちが、湿原を介した文化交流を体験することで、いつかは雨竜沼湿原のファンになっていただきたいという狙いです。

まずは、ファン層を獲得することです。そのためには少し間口を広くして、敷居を取り除くことから始めてみたいと思います。



岡本　洋典／おかもと　ひろのり　自然写真家。1957年新十津川町生まれ。動植物を含めた幅広いネーチャーフォトを実践し、北海道の自然写真における代表的写真家として活躍中。代表作「雨竜沼」は学術的にも高い評価を得ている。雨竜町エコモニターとして湿原の調査・保護活動など、自然写真を通じた自然保護活動にも携わる。雨竜町は06年、道の駅「田園の里うりゅう」に、同氏の作品を展示した「自然館」を開設する。雨竜町在住。

土の館友の会

土の博物館「土の館」



初めて乗るトラクターに生徒たちは興味津々。指導する会員にも笑顔が広がる（写真右）
蓄音機から流れる懐かしい昭和歌謡に聞き入る参加者たち。大好評に終わったSPレコード音楽会には再開催の要望が多い（写真下）



ふるさとの宝を大切に。愛郷の思いが、今ひとつに。

この町を、農業をもっと知ってほしいから

農業のまち・上富良野町の丘に建つ、土の博物館「土の館」。この博物館が北海道遺産に選定されたことを機に、２００５年、町の有志による支援団体が設立された。『土の館友の会』である。

会員は約60名。町議会議員や地元企業の経営者、役場や農協ＯＢから主婦までと実に幅広いキャリアが揃う団体だ。彼らの活動は、「土の館」の運営を全面的に支援すること。訪れる観光客のガイドを務めたり、館で行われるイベントや催事の企画を主に受け持っている。

この地を、先人の逞しさをいまに伝える語り部たち

１９２６（大正15）年、十勝岳の大噴火による泥流は、ここで農業を営む人々の家屋や田畑、そして尊い命までもを一瞬にして呑み込んだ。鉱毒を含んだ土は富良野原野を埋め尽くし、そこには作物どころか、一本の草すら生えなかったという。先人たちは何とか土を蘇らせようと、客土を繰り返し、最上部の現在の地層を作り上げた。

「土の館」には、縦４メートルにも及ぶ地層標本が展示されている。太古から続く原野の歴史を今に伝える、希少な展示資料だ。この地で生まれ育った会員たちの多くは、その当時の話をリアルに聞いて育った世代である。彼らの臨場感あふれる解説は、ここを訪れる観光客に深い感動を与える。十勝岳噴火から80年目となる２００６年には、この「土の館」で記念催事が行われる予定だ。

体験学習の場として新たなコミュニティの場として

遺産に選定されてからというもの、ここを訪れる人の数はこれまでより約40％も増加した。貴重な経験のできる学習施設として、道外から研修旅行に訪れる学校や団体も増えているという。『友の会』結成直後には、静岡県東部少年の船に参加した中学生４８０名が来館。21名の会員たちが補助説明員として携わった。トラクターの試乗会などの体験研修には、会員たちのスキルが大活躍だ。

「団体来館者への案内支援は、館としてとてもありがたく感じています」と、話すのは「土の館」顧問の穐吉忠彦氏。２００６年には、『友の会』の主催により、蓄音機を使ったSPレコード音楽会が開かれた。土の館は新たなコミュニティの場としても、活用の道が期待されている。

今後は、館内展示品に関する勉強会の開催や、案内支援の強化が目標。地域を愛する人々のピュアな思いは、上富良野の豊かな大地を潤している。

ダウン・ザ・テッシー・オーペッ実行委員会

天塩川





完遂めざし意気込む参加者たち。2005年大会スタート地点の様子（写真右） 子どもからお年寄りまで、年齢を問わずに楽しめるのもカヌーの魅力。大会には家族やグループでの参加も多い（写真下）

日本最長のカヌーレースが、流域11市町村を一本に結ぶ。

カヌーの聖地・天塩川を下るダウン・ザ・テッシー・オーペッ

石狩川に続く北海道第2の大河・天塩川。流域にダムやえん堤などの人工構造物がないこの川は、中流域から河口までの157キロメートル（約100マイル）をノンストップで下ることができる、日本最長のカヌーコースとして知られている。毎年8月上旬になると、全国のカヌーイストたちがこの地に続々と集まる。カヌーツーリング大会「ダウン・ザ・テッシーオーペッ」の参加者たちだ。

この大会を企画・運営するのは、美深町役場内に事務局を置く、『ダウン・ザ テッシーオーペッ実行委員会』。年に一度開催するこの大会は、20～40キロメートルのコースを1泊2日かけて下るというもの。すでに過去14大会を数える。また、2002年には、100マイルを3泊4日の日程で下るロングツーリング「ダウン・ザ テッシーオーペッスペシャル」を開催した。

自然と環境に魅せられて増え続ける参加者たち

天塩川流域の11市町村には、10を超えるカヌークラブが存在する。沿岸には、20ヵ所のポートをはじめ、温泉やキャンプ場などのアウトドア環境も整っている。美しい自然と快適な環境。天塩川がカヌーの聖地と呼ばれる理由は、ここにもあるのかもしれない。大会への参加者数も年々増え続け、延べ3300人を数えるまでになった。

「大会後のアンケートをみると、90%を超える方々が『満足した』と答えています」。こう話すのは、実行委員会事務局長の草野孝治氏。「この自然に接することでリフレッシュできた」「地元の方たちの声援が嬉しかった」など、都会にはない豊かな自然や、温かいふれあいに感動する声も多く寄せられたという。

06年7月、実行委員会は4年ぶりに「ダウン・ザ テッシーオーペッスペシャル」の開催を企画している。前大会の参加を逃した人や前回参加者たちからの、熱い要望に応えての再開催だ。「まずは、この大会の開催と成功が最大の目標」と、流域のスタッフたちは意気込む。

100マイルの興奮と感動がふたたびよみがえる

大会の浸透とともに、徐々に一般愛好者のツーリングが増えてきた。また、観光ツアーの新メニューに、カヌー体験が加わるようにもなった。ここを訪れる人が増えれば、周辺キャンプ場や温泉の利用や特産品普及にもつながる。流域の市町村では、そんな相乗効果も期待されている。

「北海道遺産である天塩川を生かし価値を高めるのは、流域住民の役割」と、草野氏。カヌーを通した「まちおこし」は、今まさに新たな流れに乗ろうとしている。

赤平コミュニティガイドクラブ「TANtan（たんたん）」

空知の炭鉱関連施設と生活文化





元炭鉱マンのわかりやすく、かつ臨場感あふれる説明に引き込まれる子どもたち。2005年9月に、赤平市・赤平青年会議所・Tantanが協働で、赤平市と近隣の小学生と親を対象に、一日だけの「カルチャーパーク」を開園。会場は、炭鉱施設とその周辺

おもてなしの心豊かに、炭鉱遺産をボランティアガイド。

ただ説明するのではなく心まで伝わるガイドを

赤平コミュニティガイドクラブ『TANtan（たんたん）』は、旧産炭地・赤平市で炭鉱遺産を紹介するボランティアガイドクラブ。炭鉱の歴史をまちのPRにつなげたいと、2005年5月に発足された。

メンバーは、94年の閉山まで住友赤平炭鉱で働き、炭鉱人生25年という三上秀雄氏を代表に、総勢15名。その面々は、公務員や会社員などいろいろだが、誰もが「炭鉱遺産説明ボランティア養成講座」の修了生。炭鉱の知識や機械の仕組みを講座で学び終えた今も、分かりやすいガイド・親しまれるガイドをめざし、掘進機や採炭機などの機械知識を深めたりしている。

講師を務めた元炭鉱マンの山口政美氏は、「講座は7回にわたり行いましたが、終始強調したのが、一方的に説明するのではなく、お客様に対して、〝おもてなしの心〟を持つこと。そして、双方向の関係を大切にするコミュニティガイドを心がけることでした」と話す。

その教えは、しっかりと修了生に伝わっているようだ。メンバーのひとりである植夢楽（うえむら）まみさんは、こんなことを言っていた。

「うれしいことに、見学者の方が、年々増えているんです。これからはもっと、お年寄り、お子さん、一人ひとりに沿ったおもてなしの表現方法を考えていきたいですね」

自分のしてきたことを外の世界に伝えられるのがとても嬉しい

ガイドの面々もいろいろであれば、ここに訪れる人の面々もいろいろのようだ。

昔、炭鉱で働いていた人が懐かしみ訪れることあり、私も子どもも炭鉱は初めてと目を輝かせる親子あり、祖父が働いていたと興味津々の様子で足を進める青年あり。本州からの訪問者も多いという。

「立坑の建物が、なんとも粋と熱心に写真を撮られる方もいらっしゃいました」と、嬉しそうに話すのは、植夢楽ガイド。そして、こんなエピソードも教えてくれた。

「メンバーの中に、元炭鉱マンの方がいるんですけど、自分がこれまでしてきた仕事を外に向かって話しているのが不思議に思う。それと同時に、とても嬉しいと、ぽつりと言ったんです。私はそれを聞いた時、〝たんたん〟が結成されて、本当に良かったと思いました」

炭鉱遺産に惹きつけられて、赤平に足を運ぶ人々がいる。まちの宝をガイドしながら喜びを味わう人がいる。かつて、まちを賑わせた炭鉱は、いま再び、まちを育み、人の心を豊かにしている。

旭橋を語る会

旭橋



2005年に開催した「北海道遺産　旭橋フォーラム」には、旭川市民を中心に200名ほどの参加があった。フォーラムでは、道教育大学附属旭川小学校の児童2名が「全国こども橋サミット」の模様を報告し、「旭橋をこれからも大事にしたい」と思いを発表した。



後世へ、旭橋の魅力を語り継ぐ。人々の、橋への思いをつないでゆく。

世代を超えた結束 誰もが旭橋を愛する人

2005年9月に発足した『旭橋を語る会』は、旭橋に特別な思いを寄せる20代から80代までの人々がメンバーの世代を超えて集まった市民団体だ。

発足と同年の11月には、市民に愛されている旭橋をアピールしようと、「北海道遺産 旭橋フォーラム」を開催。ノンフィクション作家の合田一道氏による講演会や「全国こども橋サミット」で旭橋について発表した小学生2名による報告会をはじめ、旭橋のイラストが描かれたレトロなマッチや包装紙など約100点のアイテムが並ぶ、旭橋コレクション展なども行われた。

「当日、70通ほどのメッセージが会場の入口に掲示されました。これは、都合がつかず、フォーラムに来られなかった方々からの思いもよらぬ贈りもの。メッセージはどれも、旭橋への思いが綴られたものでした」と話すのは、『語る会』のメンバー・海老子川（えびしがわ）雄介氏。今後も、旭橋にまつわる写真展やパネル展などを継続して行い、旭橋の魅力を発信していきたいと意欲を燃やす。

まちの元気へとつながる 架け橋役を買って出る

06年3月、「北海道遺産　旭橋フォーラム」が再び開催された。主催はもちろん『旭橋を語る会』、そして北海道開発局旭川開発建設部。

橋を生かしたまちおこしに取組んでいる室蘭の市民団体「白鳥大橋ハッピープロジェクト」に参加を呼びかけ、まちおこしのための橋談義やパネルディスカッションを行った。

『語る会』は、釧路の幣舞橋や札幌の豊平橋などの関係者にも呼びかけ、将来、「北海道橋サミット」を開催する考えだ。

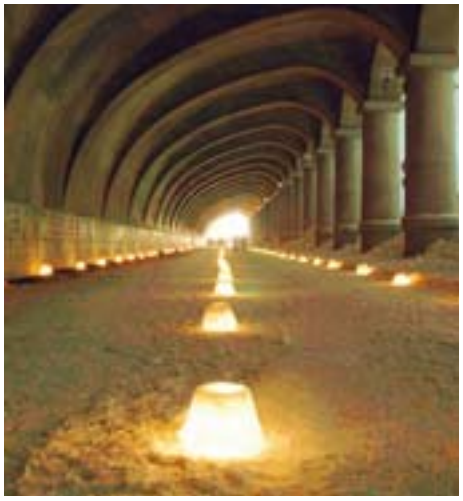
まちの、北海道の宝物 旭橋の真価とは

「旭川の橋」（旭川振興公社刊）の著者でもある『旭橋を語る会』の代表・関根正次氏は、「昭和7年の完成当時から変わらぬ姿の旭橋は、構造面も優れていますが、それ以上に、市民一人ひとりが、橋に対して家族のような愛着心を持っているのが何よりの価値」と話す。そして、「旭橋を思う人であれば、『語る会』への参加は大歓迎。いつか、旭川に住むすべての人が、思い思いに旭橋について語る。そんなイベントを開催したいです」と未来を見つめた。

group 11 北海道遺産びと

北海道遺産活用連絡会議

稚内港北防波堤ドーム 宗谷丘陵の周氷河地形



稚内市の冬を代表するイベントとなった「彩北わっキャナイト」（写真右）。北防波堤ドームをスノーキャンドルやアイスキャンドルで彩り、幻想的な世界を醸す。写真下は、周氷河地形の神秘を肌で感じる「宗谷丘陵フットパス体験ツアー」



稚内の宝を見つめ、歩み始めたグループ。
そのひとつひとつを支えるため発足。

2つの遺産選定 そして、人が動き出した

「稚内港北防波堤ドーム」は、世界でも類を見ない半円形ドーム構造。古代ローマ建築を想わせるそのフォルムは、港湾土木史上に残る傑作ともいわれている。

しかし意外にも、稚内市民の心は北海道遺産に選定されるまで、北防波堤にはそれほど向いていなかった。そこにあって当たり前。大きな災害でもない限り、北防波堤の存在を気に留める人はいない。

2003年、夏。そんな北防波堤にブラスバンドの軽快な音楽が響き渡った。選定から約2年後の出来事。「稚内のみなとを考える女性ネットワーク」が主催した「Wakkanaiみなとコンサート」だった。演奏者も聴衆も、頬を風になでられながら、今まで味わったことのない心地よさを感じていた。

そして、翌年の04年秋。「宗谷丘陵の周氷河地形」が北海道遺産に選定された。気がつけば、稚内のまちには、いろいろな市民グループが生まれていた。

宗谷丘陵には周氷河地形について紹介している案内看板が登場し、北防波堤では夏になるとコンサートが開かれる。冬は、無数のアイスキャンドルが北防波堤を灯し、たくさんの人々が、白い息を吐きながら「キレイ！」と歓声を上げる。

それぞれの活動の輝きを、ひとつとして曇らせないために。05年の冬、新たな結成が果たされた『北海道遺産活用連絡会議』。

授かった宝物を みんなで愛し愛されるものに

『北海道遺産活用連絡会議』は、市民グループと行政の結束によって誕生。遺産を生かしながらまちおこしをめざす同志として、横のつながりを強めようと発足された。

「ひとりよりふたり、ふたりより三人の方が、可能性は大きいという考えです。同じにまちを想い、同じ宝を大切にする集まりなのだから、力を合わせるのは自然なこと。今後は、美しい景観づくりや魅力ある観光空間づくりにも力を入れていきたい」と話すのは、稚内市総務部地域振興課の山本純氏。市民だけでなく、訪れる人にも愛される北海道遺産、そして稚内市をめざす。

［会の構成］
稚内観光協会
宗谷観光物産協会
稚内観光物産協会
（社）宗谷畜産開発公社
稚内のみなとを考える女性ネットワーク
稚内みなとまちづくり懇談会
未来のくらしと宗谷路を考える会
（株）ユーラスエナジー宗谷
NPO法人映像コミュニティムーブ・ユー
稚内市

［オブザーバー］
稚内開発建設部、宗谷支庁

NPO法人ピアソン会

ピアソン記念館



夏の風物詩として、すっかり市民に定着した「グリーンコンサート」。地元小中学生やコーラスグループなどが出演する（写真右） できることは自分たちの手で。資料保存用の小屋を手づくりで建てる理事たち（写真下）



人のために尽くす。宣教師の思い、いまに伝える。

すべては人のために 人間愛伝えたピアソン夫妻

アイヌ語で「地の果て」の意味を持つ野付牛（現・北見市）。この地に入植した人々の人生を「航海」に例えるなら、そこに「灯台」のごとく光を与え続けたのは、アメリカ人宣教師ピアソン夫妻にほかならない。

夫妻は、宣教師として1888（明治21）年来日。その約5年後に北海道へ移り、1928（昭和3）年に帰国するまでの約40年間のうち、最後の15年間を北見で過ごした。布教のかたわら、廃娼運動やアイヌ民族援助に尽力する夫妻。いつしか夫妻の人柄は、宗教の壁をこえて人々に愛されるようになり、惜しまれながら帰郷した。

見る記念館よりも 心を伝える記念館として

『NPO法人ピアソン会』は、ピアソン夫妻の足跡や生き方を、少しでも多くの人々に伝えようと活動する市民団体である。会員は北見市内を中心に112人。北海道遺産に選定されたピアソン邸（現・ピアソン記念館）を基点に活動を続けている。記念館の運営はもちろん、夫妻が「三柏（みかしわ）のもり」と呼び愛した敷地内の樹木や、花壇の手入れも彼らの仕事だ。

「ピアソン夫妻の業績を掘り起こし、現代に伝えていくことが私たちの使命」と語る、同会事務局長・伊藤悟氏。現代に欠けている「人のために尽くす」という生き方。そんな人生もあるということを、この記念館は教えてくれる。

記念館を全国に発信 文化・芸術の拠点としても

1914（大正3）年に建てられたピアソン記念館は、すぐれた建築家でメンソレータムの近江兄弟社の創設者でもあるW・M・ヴォーリズの設計によるものだ。06年には、全国のヴォーリズに関係する建築物や団体による、全国的なネットワークの組織づくりへ向けた計画が進んでいるという。「記念館がこれに参加することにより、全国的に知名度が上がれば」と期待が高まるばかりだ。また、記念館を文化・芸術の拠点にしようと、コンサートや企画展も積極的に行っているという。

北海道遺産の選定を受け、これまで年間2000人程度だった見学者が、3倍以上に増えた。来館して初めて夫妻の偉業にふれ、その生き方に共感する人が少なくない。「今後生きていく上での糧としたい」。そう言い残し、笑顔で去っていく人もいるという。夫妻が残したメッセージは、その遺志を引き継ぐ者の手により、いまなお人々の心に語りかける。

Essay

心意気の差が味に出る

貫田 桂一



私は料理人です。趣味は食べ歩きです。1989年ころから素材の産地を巡り歩いていたのですが、そこで出会った感動や発見を多くの方と分かち合いたいと願うようになり、ついに旅のプロデュースも手がけるようになりました。なかでもシィービーツアーズとともに企画している「貫田シェフと行く～北海道遺産・匠（たくみ）な旅シリーズ」は毎回大好評です。昨年は4回実施しましたが、たとえば、日高では「馬の文化」をめぐって「食の文化」で締めくくりました。ツアーの料理は、「日高銀聖フルコース」。銀聖とは、日高沖でとれる極上の銀毛サケの中でも、鮮度と品質が良い3・5キログラム以上のサケで、日高定置漁業者組合が規格を定めた地域のブランドです。その夕食会では、匠の〝貫田シェフ〟が食材やメニューづくりの秘話を披露し、さらに地元の匠である〝生産者〟からサケ漁業の苦労話も聞き、思いが深まりました。参加者からは「今まで日高というと昆布しかないものと思っていたのに、馬文化やサケ文化で匠の話に耳を傾け、いっぺんに日高のファンになった」という声も聞かれ、ほんとうに有意義な旅となったのです。

私は、また、地域の名物メニューには、風土の味を生かすことが大切だと考えています。そして日高の漁業者のように地域の心を伝える努力も必要です。ところが、地域の名物メニューには必ずしも地元食材が使われているとは限りません。たとえば、北海道遺産に選定された食関係の遺産にも、道産以外の素材も使われています。市場原理としては、しかたのないことかもしれませんが、長い目で見ると地域振興にとってはプラスとはいえません。北海道にはこれだけの食べものがあるのですから、もっと地元で活用しなくてはいけないのです。行く先々には、私たちがうなるような、豊かな食材と生産者の熱意があふれています。ぜひ、みなさまも、心意気の差で味に違いがあることを、いっしょに確かめてみませんか。



貫田　桂一／ぬきた　けいいち　ホテルクラビーサッポロ料理長。1960年静岡県生まれ、千歳市育ち。大阪・辻学園 日本調理師専門学校卒業後、札幌市内のホテルで修行。93年のホテルクラビーサッポロ開業時より料理長。道産食材にこだわり、生産者と消費者の橋渡し役として幅広く活躍。95年からは、北海道地域づくりアドバイザーとして、特産品やご当地メニューの開発も手掛ける。現在、STVどさんこワイドにレギュラー出演中（貫田シェフの北の絶品）。著書に「北の料理人」「北の料理人Ⅱ」がある。

特集❸

北海道遺産びと

楽しむ学ぶ

もっと宝物に近づいてみる。
もっと宝物を生かすことはできないかと考える。
それは、触れてみると奥が深く、
とてつもなく面白かったりもする。
だから、もっと近づく、考える、楽しむ。
北海道遺産は、学びと楽しさの宝庫でもある。

武四郎をたどり、北海道遺産 完全制覇を達成。

高瀬　英雄・淑子夫妻

北海道遺産には、人生を変えるほどの力がある。少なくとも、伊勢・松阪に住む高瀬英雄氏は、そう感じているだろう。

高瀬氏は、夫人と、北海道と、そして北海道の名付け親でもある幕末の探検家・松浦武四郎をこよなく愛する男だ。定年後、武四郎の膨大な資料を携え、夫人とともに1年間北海道に滞在。帰郷後、その旅先で出会った知人から、北海道遺産選定の話を聞き、いてもたってもいられず全遺産制覇の旅を決行した。なぜか。尊敬する松浦武四郎が歩き夢を描いた地が、いまどのように生きているのか。そして先人たちが、北の大地で何を成し遂げようとしたのかを肌で感じたかったからだ。

挑戦の旅は、2002年から約3年半にも及んだ。夫妻は北の大地を次々とめぐる。武四郎の残した記録と重ねながら、歩き、登り、考え、探し、話を聞いて訪ねまわる日々。そしてアイヌの里を訪ねたとき、運命の出会いが訪れた。安政5年、屈斜路湖探索の武四郎を案内した、アイヌ民族の子孫とめぐり合ったのだ。夫妻は、まるで武四郎さながらその地に留まり、アイヌの人々と語り合い、その文化を学んだ。そして、それがきっかけとなり、高瀬氏は郷里の「松浦武四郎記念館」館長に任ぜられることとなった。

旅を終えた高瀬氏はこう振り返る。人生に必要なものは何なのか。夢や希望を実現する勇気と実行力ではないのかと。「人が人として成し遂げるべきものに勇気を持って行動せよ」。北海道遺産は、私たちにそう語りかけているようだと。

最近、めっきり余暇の少なくなった高瀬氏を尻目に、夫人は単身で北海道へ渡る。やはり、北海道遺産をめぐる旅は、彼らの人生を大きく変えたに違いない。









Hideo Takase

北海道遺産びと

四季を通し、路面電車のいまを明日に残す。

アマチュアカメラマン　野村　耕一

楽しむ人がいる。学ぶ人もいる。
北の宝物を道しるべに、
遺産びとが動き出す。

聞く、見る、学ぶ。遺産めぐりの旅に人は浸る。

シィービーツアーズ　戎谷　侑男

楽しむ

Yukio Ebisutani

北海道遺産びと

路面電車を6年間、カメラを手に追い続ける人がいる。ササラ電車のインパクトに圧倒されて以来、その魅力にひき込まれたという、野村耕一氏だ。かつて、札幌市電の運転手を務めたこともある。電車の警笛を身近に感じていたいから、住まいも路線沿いに移した。そして、いまも時間の許す限り、ファインダーを通して路面電車と向き合っている。

「四季を写し込むことで、街の顔が見える」と話す野村氏。普通では見落としがちな路面電車の豊かな表情も、彼の目には鮮やかに映し出される。「野村さんの写真には、市電への愛が感じられる」。そう言われるのが、なによりも嬉しい。ただ残念なのは、札幌の空が年々狭くなっていること。街にマンションがあふれ、絶好の撮影ポイントは次々に姿を消した。それでも野村氏は、シャッターを切り続ける。この街に路面電車がある限り。





Kouichi Nomura

北海道遺産びと

地元食材を使った料理を心ゆくまで味わい、それぞれの地に息づく歴史や自然に浸り、深い感慨を土産に家路に着く。北海道遺産をめぐる旅が人気だ。

遺産選定直後の2001年から遺産めぐりのツアーを企画している、㈱シィービーツアーズ 常務取締役 戎谷侑男氏は、その人気をこう語る。

「単なる物見遊山観光の時代は終わりました。一般のツアーにはない、聞く、見る、学ぶことのできる旅こそが求められているのです」

聞けば、リピーターの割合は全体の40%。一度参加し、その土地の歴史に触れると、また次の地を訪れてみたくなる人が多いようだ。中にはこのツアーで、遺産全制覇をめざす人までいるのだという。

06年春には、新たに20コースを設定。その後も、季節に見合ったコースを企画しているという。バスの心地よい揺れに身を任せ、歴史に思いを馳せるのも悪くない。







炭鉱遺産をどう活用するか。実践を通して学ぶ計画コンペ。

「炭鉱サミット2005 in夕張」と札幌学院大学大学院



炭鉱遺産について考える一日と題して、2005年11月5日に「炭鉱サミット2005 in夕張」が開催された。当日は、夕張市をモデルに札幌圏5大学の学生による計画コンペも行われた。

最優秀賞に選ばれたのは、対象地域を歴史景観公園に見立てた札幌学院大学大学院地域社会マネジメント研究科によるプラン。「大学院で学んだ理論を、実践を通じて生かしてみたい」という院生6人が自主的にプロジェクトチームを結成し、コンペに臨んだ。

夕張の歴史的な背景や地元住民の暮らし等を考慮する一方、統計データを分析し、地道な現地調査も重ねたという。チームリーダーの上家正裕さんは「最も難しかったのはアイデアの定着。具体的にどのようなプランとして表現するのかで苦戦した」と、振り返る。担当の太田教授のアドバイスでチームは息を吹き返し、見事コンペレースを勝ち抜く。「プロジェクト全体を検証し、今後につながるように発展させていきたい」と上家さんは抱負を語ってくれた。

まちの誇り、その魅力を、全国へ伝える子どもたち。

「全国こども橋サミット」と北海道教育大学附属旭川小学校



川のまち・旭川を代表する名橋旭橋。その魅力を全国に発信した小学生がいる。道教育大附属旭川小学校6年の片桐珠希さんと渡辺夏海さんだ。

2人が参加した「全国こども橋サミット」は、橋を通して地域の魅力や暮らしとの関わりを深めようと企画されたもの。2005年度は全国から8校が参加し、作文やスライド等で、それぞれに自慢の橋を紹介した。自らも発表した片桐さんは「日本には様々な橋があることを知りました。市民から愛される橋があるのはとても嬉しい。今後も旭橋を大切に残していきます」と、決意を込めて語る。

2人が通う小学校では、これまで「旭橋」の歴史について学習会を行ってきた。2人はインターネット等で資料を集め、サミットでの発表原稿を書き上げたのだという。

いくつもの時代の中で、人々の暮らしを見つめ続けてきた旭橋。ふるさとに息づく名橋への誇りは、次代を担う子どもたちによって脈々と受け継がれていくことだろう。

想像力をふくらませながら、先人に学ぶ、未来へつなぐ。

北の縄文CLUBの「縄文文化体験学習」



1998年に立ち上げられた「北の縄文CLUB」は、函館市南茅部地域の縄文文化を盛り上げている市民グループだ。会員数は約70名。年齢層も20代~70代と幅広い。南茅部地域の発掘調査に携わる女性たちを中心に、縄文人の文化や生活に関心を寄せる人々が集まり、縄文人と同じように土器や編物を作り、体験学習を重ねている。

06年1月に体験学習した『勾玉(まがたま)づくり』では、「縄文時代の人たちが何を考え、どんな道具で、どんなふうに作ったのだろうと、想像力をふくらませながら制作できるのが楽しかった」と、参加者の嵐田美代子さん、大宮トシ子さんは声を揃える。体験メニューは、骨角器(釣り針)づくり、アンギン編み、土器づくり大会など多彩。

「さまざまな学習を通して得た知識や技術を広く知っていただき、縄文文化の普及につとめたい」。嵐田さんら会員による、時空を超えた先人たちへの敬意と親しみは、未来へつなぐ地元の人たちの誇りでもある。

北	海	道
遺	産	北海道遺産 Hokkaido Heritage
ガ	イ	ド

北海道遺産
Hokkaido Heritage

北海道遺産とは

次の世代に引き継ぎたい北海道の大切な宝物です。豊かな自然はもちろん、北海道に生きてきた人々の歴史や文化、生活、産業など有形・無形の財産の中から、道民参加によって選ばれました。
平成13年10月に第1回選定分25件が、平成16年10月に第2回選定分27件が決まり、52件の北海道遺産が誕生しています。

北海道遺産構想とは

まちの宝物を探し、それを守り、磨き、活用する過程で、まちの元気や魅力の種を育み、新しい魅力をもった北海道を創造していく運動です。北海道遺産の多くには、北海道遺産に深く関わりながら活動する「担い手」の市民が存在し、官主導ではない構想の象徴となっています。すでに、北海道遺産が所在するまちでは様々な活動が展開されるとともに、企業によるツアーや北海道遺産関連の商品開発も進み、この構想は着実に歩み始めています。

7



土の博物館「土の館」 ［上富良野町］

北海道開拓が過酷な気象条件の中で進められた経緯や、土と人間の関わりの大切さを伝えている。特に高さ4mの巨大な土の標本展示は、世界に類を見ない。

4



留萌のニシン街道（旧佐賀家漁場、旧花田家番屋、岡田家と生活文化） ［留萌市、小平町、苫前町］

ニシン漁は、松前藩の時代から北上するニシンを追い、地域にさまざまな物語を残した。留萌のニシン街道には当時の漁の賑わいや文化が色濃く残っている。

1



稚内港北防波堤ドーム ［稚内市］

世界でも類を見ない独特の景観と構造を持つ半アーチ式防波堤ドーム。港湾土木史に残る傑作であるとともに、旧樺太航路時代の記憶を残す歴史遺産。

8



雨竜沼湿原 ［雨竜町］

山地湿原の中では道内最大の高層湿原。道指定天然記念物、暑寒別・天売・焼尻国定公園特別保護地区。地元では「雨竜沼湿原を愛する会」が地道な活動を展開。

5



増毛の歴史的建物群
（駅前の歴史的建物群と増毛小学校） ［増毛町］

「旧商家丸一本間家」を始め、石造りや木造の歴史的な建物が並ぶ増毛駅周辺。また、増毛小学校は戦前期都市型木造校舎として、北海道で最も古いもの。

2



宗谷丘陵の周氷河地形 ［稚内市］

宗谷丘陵の特徴的な地形は、約2万年前、氷河周辺部での凍結融解の繰り返しによって形成された。上空から眺めると、谷が樹枝状に延びる地形がよくわかる。

9



北海幹線用水路 ［空知地域］

大正13年に着工された北海頭首工（赤平市）を起点に南幌町まで延長約80km、農業専用では国内最長の用水路。北海道の穀倉を支える重要な役割を果たす。

6



旭橋 ［旭川市］

旭川市を流れる石狩川に架かる橋。昭和7年、鋼鉄製のアーチ曲線を描く橋が当時の最新技術をもって竣工。70数年を経てもなお市民の生活と共にある。

3



天塩川 ［流域市町村］

北海道第2位の長大河川。幕末の探検家松浦武四郎が調査の途上で「北海道」の命名をしたとされる場所がある。日本有数のカヌー適地としても知られている。

20



スキーとニセコ連峰 ［ニセコ地域］

北海道人にとって冬のレジャーといえばスキー。雄大なニセコ連峰の雪質は特に素晴らしく、全国のスキー愛好者の人気を呼び、海外のスキーヤーも年々増加。

15



札幌苗穂地区の工場・記念館群 ［札幌市］

明治期から「産業のまち」として栄えた札幌市の創成川以東。レンガや札幌軟石造りの建築物も現役で稼動し、貴重な記念館群も往時の面影を今に伝えている。

10



空知の炭鉱関連施設と生活文化 ［空知地域］

空知地域は、国内最大の産炭地として最盛期に100炭鉱を数え、日本の近代化を支えた。地域に残る炭鉱遺産は、生産から生活まで多岐にわたる。

21



北限のブナ林 ［黒松内町］

ブナは温帯を代表する樹種で、北海道では渡島半島だけに分布。黒松内はその北限で、この北限のブナ林は国指定の天然記念物にもなっている。

16



小樽みなとと防波堤 ［小樽市］

「港湾工学の父」広井勇により建設された北防波堤は、独特の傾斜ブロック工法を採用した日本初の長大堤防。百年以上を経た今も現役で機能する第一級の遺産。

11



石狩川 ［流域市町村］

大雪山系を源とし、上川、空知、石狩の大平野を形成して日本海に注ぐ道内随一の大河川。北海道の歴史と文化が刻み込まれている、母なる川でもある。

22



昭和新山国際雪合戦大会 ［壮瞥町］

ルール・用具開発から企画運営まで、地域住民が主体となって進めている、北海道ならではの冬文化。今では北欧など海外でも「YUKIGASSEN」が開かれている。

17



ニッカウヰスキー余市蒸溜所 ［余市町］

昭和11年にウイスキーの製造が開始されて以来、変わらぬ製法で蒸溜、貯蔵を行う。スコットランドを偲ばせる社屋は、当時の社員の手作りによって建設された。

12



江別のれんが ［江別市］

大正以降、れんが製造の中心が全道一の陶土地帯である江別へ移り、現在も3つの工場が稼動。市内には、400棟以上のれんが建築物が美しい姿で現存している。

23



登別温泉地獄谷 ［登別市］

約1万年前の火山活動によって生まれた爆裂火山口跡。登別温泉最大の源泉でもあり、ここから成分の異なる湯が温泉街の旅館やホテルに給湯されている。

18



積丹半島と神威岬 ［積丹半島］

積丹半島は明治から昭和初期にニシン漁の旧大漁場として発達。絶景の海岸美に沿って、番屋、揚場跡、袋澗、トンネル、旧街道などの遺構を見ることができる。

13



北海道大学 札幌農学校第2農場 ［札幌市］

日本農業近代化のモデルとしてクラーク博士が構想。模範家畜房（モデルバーン）および穀物庫（コーンバーン）は、明治10年建築。北海道大学でも最古の施設群。

24



内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群
［函館市、伊達市など］

縄文文化の交易路であった内浦湾沿岸。大船遺跡は、集落規模としては国内最大級。また、北黄金貝塚からは、全国的に貴重な「水場の祭祀場」が発見された。

19



京極のふきだし湧水 ［京極町］

羊蹄山に降った雨や雪解け水が濾過されて湧き出る国内最大級の湧水。1日の湧水量は8万トンで、30万人の生活水に匹敵。環境庁「名水百選」にも選ばれている。

14



開拓使時代の洋風建築
（時計台、豊平館、清華亭など） ［札幌市］

札幌では開拓使の事績を語る建築群が数多く遺され、なかでも時計台のように、都心部にあって市民やまちとともにある姿は、誇るべき歴史遺産といえる。

34



螺湾(らわん)ブキ　［足寄町］

足寄町の螺湾川に沿って自生する高さ2〜3mに達する巨大なフキ。なぜ大きくなるのかはいまだに謎が多い。産学官が一体となった商品開発も進められている。

29



函館山と砲台跡　［函館市］

津軽海峡を望む函館山は明治中期に北方警備のため要塞化が進められ、多数の掩蔽壕・砲台座が残る。これほど大規模の旧状を残す軍事土木遺産は全国的にも稀。

25





姥神大神宮渡御祭／江差追分　［江差町］

姥神大神宮渡御祭は、ニシンの豊漁に感謝を込めて、約360年も続けられてきた伝統の祭。毎年8月上旬に行われる。13台の山車(やま)が、祇園囃子の調べにのって町内を練り歩くさまは圧巻。

江差追分は、中山道の馬子唄をルーツとする北海道の代表的民謡。厳しい風土にもまれながら、多くの先達に唄い継がれてきた。国内はもとより海外にも、多くの愛好者を持つ。

35



旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群
［上士幌町］

昭和初期建設の橋梁群。市民と産学官による運動の結果、34橋梁が保存された。担い手たちの活動は、産業遺産の保全・活用モデルとして全国的に知られる。

30



函館西部地区の街並み　［函館市］

埠頭倉庫群のほか、明治期の大火後に再興された街並みが現存。ハイカラな洋風建築とともに和洋折衷がたくみな商家や住宅により独特の景観を創出している。

36



霧多布湿原　［浜中町］

一部は「霧多布湿原泥炭地形成植物群落」として天然記念物に指定。ラムサール条約湿地にも登録されている。地域住民による湿原保全のトラスト活動も有名。

31



路面電車　［函館市、札幌市］

函館市電は大正2年に電車化、市民の足として大きく発展。一方、大正7年に始まった札幌市電は「市民の足」の花形だったが、現在は1路線を残すのみ。

26



上ノ国の中世の館(たて)　［上ノ国町］

館とは、中世に多く造られた山城のこと。勝山館・夷王山墳墓群の発掘調査からアイヌ民族の墓も確認され、和人とアイヌ人の共生の証として注目されている。

37



摩周湖　［弟子屈町］

世界有数の透明度と乳白色の霧の風景で知られる北海道の代表的な湖。自然環境と調和した観光産業の活性化を試みる地域住民の取組みも注目されている。

32



静内二十間道路の桜並木　［新ひだか町］

直線で7km、幅20間(約36m)にわたり、約3000本にのぼるエゾヤマザクラなどの並木が続く。雄大な日高山脈を背景とした景観は我が国で類を見ないスケール。

27



福山(松前)城と寺町　［松前町］

江戸時代の日本で最後に築城された城郭。城の北側には道内唯一の近世的な寺町があり、龍雲院、法源寺、松前家の菩提寺・墓所など5つの寺が現存している。

38



根釧台地の格子状防風林　［中標津町など］

そのスケールは地球規模的で、雄大なもの。防風効果、野生生物のすみかや移動通路としての機能のほか、開拓時代の殖民地区画を示す歴史的意義も持つ。

33



モール温泉　［音更町など］

泥炭を通して湧出。植物成分が多いのが他の温泉との違い。日本では北海道の十勝のほか、石狩平野や豊富町などに湧出。美容に効果があるとも言われている。

28



五稜郭と箱館戦争の遺構　［函館市など］

明治元年10月、旧幕府脱走軍の侵攻に始まる箱館戦争。五稜郭、四稜郭、土方歳三が戦死した一本木関門跡など、戦いの遺跡・遺構は道南一帯に見られる。

48



アイヌ文様　［北海道各地］

アイヌ文様は家族ごとに独自のものがあり、それぞれの子孫に受け継がれる。その形状、図案、色彩は、美的価値が高く、文化的にも秀逸なものである。

43



オホーツク沿岸の古代遺跡群　［網走地域］

縄文からアイヌ文化まで、各時代の遺跡が分布するオホーツク沿岸。樺太・シベリアなど大陸諸文化との関係、北方古代文化の解明に果たしていく役割は大きい。

39



野付半島と打瀬舟　［別海町、標津町］

全長26kmの日本最大の砂嘴(さし)。トドワラ、ナラワラの特異な景観や、春と秋、野付湾に浮かぶ打瀬舟の風景が多くの人々をひきつけている。

49



アイヌ口承文芸　［北海道各地］

アイヌ民族の間で語り伝えられてきた、英雄叙事詩、神謡、散文説話など。サコロペ、ユカㇻなどと呼ばれる英雄叙事詩では、壮大なストーリーが展開される。

44



流氷とガリンコ号　［紋別市など］

冬のオホーツクでは砕氷船ガリンコ号による“流氷観光”が人気。沖合にあるオホーツクタワーでは、海底からの流氷観察や流氷下の様々な生態の観察もできる。

40





ワッカ／小清水原生花園
［北見市・小清水町］

ワッカ原生花園は、「龍宮街道」と呼ばれる日本最大の海岸草原。オホーツク海とサロマ湖に面し、春から秋には300種以上の草花が咲く。車両進入規制や漁協による植林など先駆的な試みを展開。

小清水原生花園は、オホーツク海と濤沸湖にはさまれた細長い砂丘。野鳥の到来も多い。一時期、花が衰退したが、野焼きや帰化植物の除去を行い、花のあふれる公園によみがえった。

50



サケの文化　［北海道各地］

サケと人との関りは古く、北海道にはサケ漁をしたと推定される擦文時代の遺跡もある。またサケの母川回帰は自然環境保護の指標としての役割も果たしている。

45



屯田兵村と兵屋　［北海道各地］

明治期に開拓と軍備のため北海道に配備された屯田兵。上湧別町をはじめ道内各地に兵屋が保存され、北見市の信善光寺には屯田兵人形75体がまつられている。

51



北海道のラーメン　［北海道各地］

北海道の代表的な食文化として発展したラーメン。観光資源でもあり、地域ごとに特色を持ったラーメンが脚光を浴び、新たな地域づくりへとつながっている。

46



北海道の馬文化
（ばん馬、日高のサラブレッドなど）　［北海道各地］

開拓の労働力でもあった農耕馬。その力を試したお祭りばん馬は、「ばんえい競馬」に発展。また軽種馬の主産地日高地方には、北海道らしい牧場風景が広がる。

41



ピアソン記念館　［北見市］

アメリカ人宣教師ピアソン夫妻の私邸として1914年に建てられた。夫妻の志の高い生き方は北見の精神文化のよりどころとして、多くの市民に親しまれている。

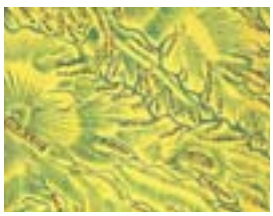
52



ジンギスカン　［北海道各地］

お花見、キャンプといえばジンギスカン。発祥については諸説あるが、北海道独自の羊肉料理として発達。観光のひとつの魅力づくりとしても役立っている。

47



アイヌ語地名　［北海道各地］

北海道の地名の多くはアイヌ語に由来する。現在は片仮名や漢字で表記されるが、本来はアイヌ民族の自然と調和した伝統的生活の中から歴史的に形成された。

42



森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」　［遠軽町］

東京・雨宮製作所製造、初の国産11トン機関車。町は「森林公園いこいの森」に鉄道を敷設し、昭和54年から機関車を運行。この動態保存は道内では唯一のもの。

北海道遺産の分布（全52件）



＜北海道各地＞

45 屯田兵村と兵屋
46 北海道の馬文化（ばん馬、日高のサラブレッドなど）
47 アイヌ語地名
48 アイヌ文様
49 アイヌ口承文芸
50 サケの文化
51 北海道のラーメン
52 ジンギスカン

北海道遺産
Hokkaido Heritage

01. 稚内港北防波堤ドーム
02. 宗谷丘陵の周氷河地形
03. 天塩川
04. 留萌のニシン街道（旧佐賀家漁場、旧花田家番屋、岡田家と生活文化）
05. 増毛の歴史的建物群（駅前の歴史的建物群と増毛小学校）
06. 旭橋
07. 土の博物館「土の館」
08. 雨竜沼湿原
09. 北海幹線用水路
10. 空知の炭鉱関連施設と生活文化
11. 石狩川
12. 江別のれんが
13. 北海道大学 札幌農学校第2農場
14. 開拓使時代の洋風建築（時計台、豊平館、清華亭など）
15. 札幌苗穂地区の工場・記念館群
16. 小樽みなとと防波堤
17. ニッカウヰスキー余市蒸溜所
18. 積丹半島と神威岬
19. 京極のふきだし湧水
20. スキーとニセコ連峰
21. 北限のブナ林
22. 昭和新山国際雪合戦大会
23. 登別温泉地獄谷
24. 内浦湾沿岸の縄文文化遺跡群
25. 姥神大神宮渡御祭と江差追分
26. 上ノ国の中世の館
27. 福山（松前）城と寺町
28. 五稜郭と箱館戦争の遺構
29. 函館山と砲台跡
30. 函館西部地区の街並み
31. 路面電車
32. 静内二十間道路の桜並木
33. モール温泉
34. 螺湾（らわん）ブキ
35. 旧国鉄士幌線コンクリートアーチ橋梁群
36. 霧多布湿原
37. 摩周湖
38. 根釧台地の格子状防風林
39. 野付半島と打瀬舟
40. ワッカ/小清水原生花園
41. ピアソン記念館
42. 森林鉄道蒸気機関車「雨宮21号」
43. オホーツク沿岸の古代遺跡群
44. 流氷とガリンコ号
45. 屯田兵村と兵屋
46. 北海道の馬文化（ばん馬、日高のサラブレッドなど）
47. アイヌ語地名
48. アイヌ文様
49. アイヌ口承文芸
50. サケの文化
51. 北海道のラーメン
52. ジンギスカン



Do isan
私たちは北海道遺産構想を
応援しています

北海道遺産応援団

北海道経済連合会
社団法人 北海道商工会議所連合会
北海道経営者協会
北海道商工会連合会
北海道中小企業団体中央会
社団法人 北海道観光連盟
社団法人 北海道建設業協会
札幌商工会議所
北海道農業協同組合中央会
北海道信用農業協同組合連合会
ホクレン農業協同組合連合会
北海道厚生農業協同組合連合会
全国共済農業協同組合連合会北海道本部
株式会社 NTTドコモ北海道
北海道旅客鉄道 株式会社
北海道中央バス 株式会社
宝酒造 株式会社
ジェイ・アール北海道バス 株式会社
有限会社 神内ファーム21
株式会社 竹中工務店北海道支店
中道リース 株式会社
野口観光 株式会社
プロミス 株式会社
北海道ガス 株式会社
株式会社 北海道銀行
北海道電力 株式会社
株式会社 北酒連
雪印乳業 株式会社
アークスグループ 株式会社 ラルズ
株式会社 ロイズコンフェクト
ロッテスノー 株式会社
株式会社 ノーザンクロス

［協力］
財団法人 太陽北海道地域づくり財団
財団法人 北海道地域総合振興機構
財団法人 北海道バス協会
日本郵政公社北海道支社
財団法人 北海道市町村振興協会
北海道市長会
北海道町村会
北海道



お問い合わせ先

北海道遺産構想推進協議会

〒060-0004
札幌市中央区北4条西6丁目毎日札幌会館3階
TEL 011-218-2858
FAX 011-232-4918
メールアドレス
heritage@northerncross.co.jp
ホームページ
http://www.hokkaidoisan.org

発 行 日：平成18年3月31日
発　　行：北海道遺産構想推進協議会
編集制作：株式会社 イザ
印　　刷：株式会社 須田製版

＜取材協力一覧＞　※敬称略・掲載順

北海道市営競馬組合
北海道立オホーツク流氷科学センター
ニッカウヰスキー株式会社北海道工場
黒松内町ブナセンター
壮瞥町経済課
昭和新山国際雪合戦実行委員会
萱野茂二風谷アイヌ資料館
エフエム二風谷放送（FMピパウシ）
国稀酒造株式会社
株式会社畠山レンガ施工
米澤煉瓦株式会社
江差追分会
江差町産業振興課
NPOひがし大雪アーチ橋友の会
白滝悠遊塾
かがけやコトニ実行委員会
苗穂駅周辺まちづくり協議会
登別市観光ボランティアガイド
登別市観光経済部観光室
認定NPO法人霧多布湿原トラスト
土の館友の会
ダウン・ザ・テッシ-オ-ペッ実行委員会
赤平コミュニティガイドクラブTANtan
旭橋を語る会
旭川市企画財政部企画課
北海道遺産活用連絡会議
稚内市地域振興課
稚内市商工観光課
NPO法人ピアソン会
高瀬英雄・淑子
野村耕一
株式会社シィービーツアーズ
札幌学院大学大学院
北海道開発局旭川開発建設部地域振興対策官
北海道教育大学附属旭川小学校
北の縄文CLUB
NPO法人函館市埋蔵文化財事業団



発行
北海道遺産構想推進協議会
TEL011（218）2858
FAX011（232）4918



北海道遺産
Hokkaido Heritage